
Tales of Caprice

御劔剣次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tales of Caprice

【Nコード】

N1201B

【作者名】

御劔剣次

【あらすじ】

強くなりたいという考えだけで村を飛び出す主人公エル。とある儀式を成功させるために、世界中から生け贄を集める三人の詠唱士。二つの平行線（物語）は、徐々に角度を変えて、やがて交わる……

【不定期連載に移行】

第一章 一部（前書き）

テイルズですので、この物語には少しゲーム風なイメージで書いたところもあります。もちろんスクリーンチャットをイメージしたところもあります。

第一章 一部

雲が見下ろせるほど高くにそびえる塔。その頂上で三人の詠唱士達が、三角形に向かい合って立っている。

「始めるぞ」

一人の年老いた詠唱士がそう言うのと、三人は手にもった杖を上に掲げた。三人の杖が一斉に輝きだす。

「今度はうまくいきそうだね」

もう一人の若い詠唱士が笑いながら言った。

そうしている間に、三人の三角形の中心では光の玉が出来ている。少しずつ大きくなっていく光の玉。

「……成功なのか？」

一番若い詠唱士が不安げにそう言った。

三人の間で大きくなっていく光の玉。しかし、突然その成長が止まった。

「何が起こったんだ？」

二番目に若い詠唱士があわてて力を込める。

「待て、慌てるなシュトナ」

老いた詠唱士の制止を聞かずに力を込め続ける詠唱士。そうしているうちに光の玉は青色から赤色に変わって、消えた。

「……失敗だ」

老いた詠唱士はそう呟き、杖を下ろした。

「チックシヨー！」

シュトナと呼ばれた詠唱士が杖を床に叩きつける。

「……」

一番若い詠唱士は静かに杖を下ろした。

「なあグラングダム、どうして成功しねえんだよ！」

シュトナは老いた詠唱士に問い詰めた。

「わからん。確かに石板にある通り、儀式をしたのだが……」

グラन्दムと呼ばれた詠唱士は、後ろにそびえる大きな石板に近寄った。

「何かが足りないのか……」

グラन्दムは石板に触れた。

「やはり、ここに書かれていることがわからなければ駄目か」

グラन्दムは、石板に描かれている文章の一番下の文字列を指でなぞった。

「……心清き者、我に贄として捧げ、式は樹立する」

二人の詠唱士は驚いて一番若い詠唱士を見た。

「い、今読んだのはおまえか？」

シュトナは一番若い詠唱士に尋ねた。

「でかしたぜフェルト！ グラन्दム！」

グラन्दムはうなずいた。

「シュトナ、フェルト、贄となる『心清き者』を探してくるのだ」

「しかし、それでは……」

フェルトと呼ばれた詠唱士が焦りの表情で言い掛けるが、シュトナに遮られた。

「おまえの言いたいことはわかるぜ。市民を生け贄になんか出来ない、だろ？」

シュトナはフェルトの肩を叩きながら、フェルトの耳元で囁いた。
「だけどよ、この国のためだ」

シュトナはフェルトの肩をより強く叩いて、塔の出口に向かった。

「……フェルトよ、仕方がないのだ」

グラन्दムがやさしく言った。フェルトは軽くうなずき、シュトナのあとに続いた。

「ふう……」

深い森の中。背中合わせに立って、武器を構えている少年が二人。

「だっから反対だったんだよ！　こんな森んなかで強化訓練なんかなよ！」

槍を構える少年が、背面の少年に怒鳴った。

「そんなに近くで怒鳴らなくても聞こえてるよ！　それより、こんだけいたら確実に強くなれる」

もう一人の剣を構える少年が笑いながら言った。

「……バカだな」

槍を構えている少年が呟くと、まわりを囲んでいた魔物達が一斉に襲い掛かってきた。

「来たな！　エンシュウザン円周斬！」

剣を持った少年が回転切りを放つ。襲い掛かってきた魔物が吹き飛ばされる。

「コハソウソウ弧破双槍！」

槍を持った少年は槍を思い切り左右に振る。魔物達がなぎ倒された。

しばらくすると、少年達を囲んでいた魔物達は全滅していた。

「し、死ぬかと思ったぜ……」

槍を地面に突き刺して座り込む少年。

「だいたいなあエル、いくら何でも無茶すぎだぜ。生きてたからよかったものの……」

座っている少年の話を無視して、エルと呼ばれた少年は剣を振っている。

「ん、違うな……さっきの状況だと、こうでこう……いや……こうかな……あいた！」

後ろからグーで殴られるエル。

「人の話は聞け！」

「痛いな……ちよつとは手加減してよラーバル」

エルは頭をさすりながら起き上がった。涙目でラーバルという少年を見上げる。

「うるせえ、てめえがわりいんだろ……！？」

ラーバルは突然槍を地面から引き抜いた。

「伏せる、エル！」

ラーバルの突然の行動に混乱しつつ、言われた通りに伏せるエル。次の瞬間、エルの頭上を槍がかすめ、魔物を引き裂いた。

「あつぶねー。あと少してやられるとこだったぜ」

ラーバルはそう言つと、エルを引つ張り立たせた。

「とりあえず、村に帰るぞ。イゼリアさんがカンカンだろうからな」
ラーバルが意地悪くそう言つと、エルの表情が凍った。

「あ……お、お願いラーバル、助けて！」
「嫌だね」

エルの頼みを一言で断つて歩きだすラーバル。エルはガクツつとうなだれてあとに続いた。

「こんのバカガキが！ 余計な心配かけさせてからに！」

エルは正座させられ、説教されていた。

「すみませんでした……」

「おまけにラーバルくんも巻き込んで、危うく死にかけたそうじゃないか！」

エルの反省の言葉を無視して怒鳴り続けるイゼリア。その声は村中に響く。

「すみませんでした……」

エルはただそれしか言えなかった。

「あーあ、やっぱりな」

ラーバルは、エルの家の近くに生えている木に寄り掛かって、いわゆる立ち聞きをしている。

「これで当分はおとなしくしてるだろうな」

リングをかじり、水車小屋に向かって歩きだすラーバル。

「……なわけないか」

笑ってリンゴの芯を投げ捨てた。

第一章 一部（後書き）

エル＝キュアリス 年齢16才 身長163cm 明るくて
活発的な元気な少年。幼い頃から親友のラーバルとともに遊び回っ
ていた。剣士に憧れて、ただ強くなりたい一心で村を飛び出した。

第一章 二部

「これとこれと……あとこれも」

エルは色々なものをカバンに詰める。窓の外は深い闇、つまり夜中である。

「食料は……なんとかなるか」

ちよつとした大きさになったカバンを背負うエル。

「さすがに玄関からは出られないだろうな」

そうつぶやくと、エルは窓を開け、棹に足を掛けた。

「一、二の、三！」

二回の窓から飛び、芝生の上に落ちた。

「いたたたた……少し無茶だったかな？」

へへつと口の端をあげて笑うと、立ち上がって歩きだす。

「イゼリアさんのせいで全然剣の修業が出来ないからな！。強くなつて帰ってきたら、みんな驚くだろうーな」

鼻の頭を掻きながら笑う。村の出口に差し掛かった頃。

「やっぱりな。おまえのことだから、家出するとは思ってたが、こつちも思い通りになるとは思わなかったな」

聞き覚えのある声が木の裏から聞こえてきた。エルはびくつとそつちを見た。

「ら、ラーバル！？」

エルはあわてて、他に誰もいないことを確認すると、ラーバルに歩み寄った。

「頼む！ 止めないでくれ！」

頭を下げて言うエル。

「……ちよつとこい」

ラーバルはエルの腕を引いて、村から少し離れた広場に連れてきた。

「何する気だ？ ま、まさか、男同士であんなことやこんなことを

!？」

ラーバルはエルの頭を本気で殴る。

「いだ！ 冗談だって……で、本当になにするわけ？」

頭をさすりながら聞くエルに、真剣な顔を向けるラーバル。

「どうせ止めたって無駄だろうから、止めねえよ」

ラーバルは、練習用の槍を構えた。

「だけど、魔物は強い。生半可な強さじゃ、あつという間にあいつらの餌になるだけだ」

大体ラーバルが言いたいことを理解したエルが、練習用の木刀を構える。

「行くんなら、俺を倒してからにしろってか？」

二人の間に張り詰めた空気が流れる。

「行くぞラーバル！」

先に仕掛けていったのはエルだった。しかし、ラーバルは槍のリーチを活かした戦い方をする。

「うわ！ ひ、卑怯だ！」

「馬鹿野郎！ 魔物には卑怯もへったくれもねえぞ！」

ラーバルは手を抜かずに攻め続ける。避けたりなやしたりするの
で精一杯のエル。

「うわ、うわわ！」

とうとう動きも見切られてきて、槍の先がかすりはじめてきた。

「ほらほらどうした！ こんな調子じゃ、このノイン地方から出る
前にくたばっちまうぞ！」

ラーバルは本気で突いてきている。いや、その目には殺気すらこ
もっている。

「ちつくしよー、言わせておけば！」

強がりと言っているが、エルは半分泣いていた。全身の痛みと、
ラーバルの殺気と、自分の弱さに。

「泣きべそかくな！ 本当の戦いじゃ、泣いてる暇なんてねえんだ
ぞ！」

エルは今の一言で気が付いた。ラーバルは自分を止めようとして
いるんじゃない、強くしようとしていることに。

「うるさい、泣いてなんかない！」

心のなかにうれしさが満ちてくる。こいつは、ラーバルは、どんなときでも俺の味方なんだ！ そう思うと、悔し涙の代わりに嬉し涙が溢れてきそうだった。

「行つくぞー！ ラーバル！」

エルはラーバルの槍を弾いて、ラーバルの体を突いた。

「ぐふ！ ま、まだ……！？」

体勢を立て直したラーバルの目に、突きの構えをとるエルが移った。

「シュントツゲキ
瞬突撃！」

二発目の突きは、ラーバルの体の中心、鳩尾をしっかりとらえた。

見事な二段突きだった。

「やるじゃ、ねえか」

ラーバルは突きの衝撃で後ろに倒れこんだ。

「ラーバル、大丈夫！？」

エルはすぐさまラーバルのもとに駆け寄った。ラーバルはのたうちまわっている。

「はあ、うぐ！ 約束……だしな……」

息も絶え絶えにラーバルが起き上がる。

「行っても、いいぜ……ただし」

ラーバルはエルを見て、微笑む。

「おまえだけじゃ心配だから、俺も付いていく」

「……え？」

エルが驚きの表情になる。

「ダメか？」

ラーバルが拳を突き出す。

「うつん、全然！ むしろありがたい！」

エルはラーバルの拳に、自分の拳をぶつける。朝日が二人を照らす。

「よし、じゃあ急いで出発だ！ イゼリアさんが起きる前に！」

エルはうなずいて、自分のカバンを肩に下げる。そして、二人揃って走りだした。

「まったく、そういうとこばかり両親に似るんだから」

エルとラーバルが戦った広場を見渡せる岡の上で、イゼリアが言った。

「ラーバルくんもラーバルくんね。なかなか粋なことしちゃって……」

イゼリアはふうつとため息を付いた。

「まったく、あいつらがいなくなると、村が静かになるねえ……」

イゼリアはわずかにこぼれた涙を拭い、大きく息を吸った。

「あんたたち！ 手ぶらで帰ってきたら承知しないからね！」

イゼリアは、堂々と胸を張って、手を振りつつ走っていく二人の少年達を見送った。

「おい、今のイゼリアさんの声じゃねえか？」

ラーバルが振り返り、岡の上に立つ小さな人影を見た。

「あそこにいるってことは、全部見てたってこと！？」

エルは再び胸がいっぱいになった。人生の敵だと思っていたイゼリアおばさんが、初めて自分の味方になってくれたような気がしたからだ。

「……行ってくるよ、イゼリアさん」

エルは手を振りながら走っていった。

第一章 二部（後書き）

ラーバル＝ライナス 年齢18才 身長175cm 普段は
静かで勤勉家だが、すぐに調子に乗ったり、周りにあわせて騒がし
くなったりする。村を出たことが無いのに、かなりの物知りである。
なぜかエルが唯一の友達で、エルのお兄さん代わりでもある。

第一章 三部

「うおりゃあ！」

襲い掛かる魔物『ファイティングベア』を切り倒すエル。だが、一匹が倒れても、違うファイティングベアが襲い掛かる。

「き、厳しー！」

エルはかなり疲労していた。

「馬鹿、休むな！」

ラーバルは突きや薙ぎ払いを繰り返しながらエルに近づく。

「だって、こいつらいくら倒しても襲い掛かって来るんだぜ？」

エルが弱音を吐くと、ラーバルは笑った。

「おまえらしくないな。こんだけ沢山いたら、どうなるんだ？」

ラーバルの言葉で、自分がなにをしに来たのかを思い出すエル。

「……強くなれる」

エルは再び剣を振るう。

「よし、その調子だ！ あと少しで街に着く、それまで耐えろ！」

ラーバルがそう言うのと、二人とも進みはじめる。

「そこ、邪魔だ！ 突牙弾！」
トッガダン

槍を思い切り前に突き出し、ファイティングベアを貫いた。

「よし今だ、走れ！」

ラーバルの合図で、突牙弾で倒したファイティングベアの上を通って逃げる二人。

「はあ、はあ、ここまで来たらもう大丈夫だ」

ラーバルはエルに水筒を渡す。一気に飲み干すエル。

「……つぶは！ 生き返ったー！」

草原に横たわるエル。ラーバルも隣に座った。

「あれが、街？」

上体を起こしたエルが、正面に見える、建物が大量に建っているところを指差した。

「ああ、そうだ。あれが工業が盛んな『ハリスルネス』だ」

ラーバルが自慢げに言った。

「へえー。で、なんでそんなに詳しいの？」

エルが尋ねた。ラーバルは笑ってエルのほうを向く。

「こう見えても俺は、世界地図であっちこっちの街や国、地方や地名などほぼすべてを暗記したんだよ」

ラーバルがいかにも誇らしげに言った。

「うっそ！ マジ、すっげー！」

エルが本気で驚いた。ラーバルは高らかに笑った。

「まあ、地理先生とでも呼んでくれ」

「地理先生！」

しばらく休憩した二人は街に向かった。風が草をなびかせ、葉の擦れる音が耳に心地よかった。

街の入り口まで来た。街はかなり賑わっていた。

「すっげー！ 人がいっぱいいるー！」

エルはあっちこっちを目で追っている。見るものすべてが、田舎で育ったエルにとって、刺激的なものだった。

一方、ラーバルはというと……。

「本当にすげー！ うわー、生きててよかったー！」

エルと一緒にあってあっちこっちを見ている。田舎丸出しなので、他の人の視線を集めているが、二人はまったく気にしない。

「とりあえず、金をなんとかしないとな」

やっと冷静さを取り戻したラーバルが言った。

「そうだね、おいしいもの食べたいし」

エルがお腹をさすりながら言う。

「ちょっと待ってる、今アイテムショップ探してるから」

ラーバルとエルは街の中を、アイテムショップを探して歩いている。

「どこだあ？ うーん……」

ラーバルが左右を見渡す。すると、通りに看板がぶら下がっているのが目に入った。

「あつた！」

「え！？ マジ！ どこそこ！」

急かすエルをなだめつつ、目標の建物に入る。

「いらつしゃいませ！」

可愛らしい少女が愛想よく言う。

「アイテムを売りたいんですけど」

ラーバルが袋いっぱいファイティングベアの爪や牙を見せた。

本当は毛皮のほうが高いのだが、あの状況では難しい。

「かしこまりました。少々お待ちください」

少女は袋を受け取ると、中身を数えはじめた。

それを待っている途中だった。

「ん？ 外が騒がしいな」

ラーバルが異変に気付き、窓を見た。

「もとからじゃない？ …… 本当だ。なんか、違う騒がしいだ」

エルも気付いて、二人で外に出る。

「な、なんなんだおまえは！？」

中年男が、白いローブを頭から被った者に向かって言った。

「ご心配なさらずに。抵抗しなければ何も致しません。しかし、逆らえばこうなります」

白いローブの者は、片手に掴んでいた青年を中年男の前に投げ捨てた。

「う……あ……」

青年はほぼ虫の息だった。

「き、貴様は何が目的なんだ!？」

中年男がローブの者に聞いた。

「私はただ『適格者』を探しに來ただけです。このメンタル・クリスタルに反応するものを」

そう言つてローブの者は、手のひらほどのクリスタルを取り出した。

「さて、適格者はいますかねえ」

ローブの者は、クリスタルを持った手を、集まつた市民に向けてかざした。すると、あるところでクリスタルが輝いた。

「いましたね、どなたでしょうか？」

ローブの者は真つすぐ歩いた。市民は後ろに退く。

「動かないでください。わからないでしょう」

ローブの者は静かに笑うと、真正面の市民達に向かつて左手を突き出した。

「マグネット・フィールド」

詠唱を終えたとたん、市民達が磁力の空間に閉じ込められ、動けなくなった。

「これでいい」

ローブの者は、ゆっくりと近付き、一人の女性の前で止まった。

クリスタルが輝きを放ちながら、ローブの者の手から軽く浮いていた。

「あなたは選ばれし者だ。一緒に行きましょう」

ローブの者は女性に手を差し伸べる。

「い、イヤ!」

女性はその手を拒んだ。するとローブの者は、ため息をついたあと、左手を女性に向けた。

その瞬間に、女性は磁力の玉に取り込まれた。

「では行きましょうか」

ローブの者が、女性を連れて行こうとしたとき……。

「待て！ そのローブ野郎！」

エルがローブの者を制止した。ローブの者は振り返った。

「なんでしょうか」

ローブの者は静かに言った。

「その人を放せ！」

ラーバルが叫んだ。市民達は二手に別れて、エル達とローブの者の間から離れたため、三人は向き合う形になる。

「放せ、ですか。それはできません。これも命令でしてね」

ローブの者が再び進みはじめる。

「待てって言うてんだろ！」

エルがそれを追い掛けて、剣を抜いた。ラーバルもそれに続いて槍を構える。

「……争いごととは好きではないんですがね」

ローブの者は仕方ないといった様子で、女性の入った磁力玉を後ろに下からせる。

「うああああ！」

エルが真っ先に動いた。

「おやおや、猪でもあるまいに」

ローブの者は懷からナイフを取り出し、投げ付けた。だが、エルはあっさりとそれを弾き返した。

「円周斬！」

得意の回転切りを放つが、ローブの者は軽々と避けた。エルはなおも追撃する。

「突牙弾！」

突如視界外から来た攻撃に反応しきれなかったローブの者。わずかに身をよじり、腕をかすめる程度に押さえた。

「ふふ、やりますね。まさかここまで出来る人がいるとは思いませんでしたよ」

ローブの者は真っ赤に染まった腕の部分をグッと押さえた。

「面倒ですね。一気に終わらせてしまいましょう」

ロープの者は左手をエル達に向けた。

「マグネット・フィールド」

その瞬間、エル達の周りに磁力の空間が発生し、エル達を拘束した。

「うわっ！ 動けねえ！？」

そんなエル達を尻目に、ロープの者は女性を連れていく。

「殺しの許可は下りてませんからねえ、見逃してあげますよ」

フツと鼻で笑った後、ロープの者は磁力玉を作り出し、それに入って空へと上がった。

「ま、待ちやがれ！」

エルの叫びは、届かなかった。

第一章 三部（後書き）

イゼリア「マリア 年齢42才 身長196cm エルの保護者の女性。体付きはがっちりしている、肝っ玉おばさん。村のみんなからイゼリアさんと呼ばれる。

第一章 四部

「くっそー！」

磁力の空間が解けた後、地面を思い切り殴るエル。

「……あいつ、強い」

ラーバルはぼそつと言った。エルがさらに地面を殴る。

「違う……悔しいけど、俺たちが弱いんだ」

エルは地面を三度程殴った。周りの市民達はそれを見るに堪えかねて、慰めの言葉を掛ける。

「おまえたちはよくやったよ」

「仕方がない。あいつが強すぎたんだ」

「そんなに落ち込まないで。あなたたちは本当によくやったわ」

エルには、その一言一言が胸に突き刺さる刺となった。

「うぐ……えぐ……ひぐ……」

地面に突っ伏し、涙を落とす。ラーバルはエルを冷たい目で見ていた。

「さつさと立て。今頃、数え終わってるだろうし、金を取りに行くぞ」

ラーバルはそう言い放つと、歩きだした。エルは立ち上がり、ラーバルに駆け寄って肩を掴み、自分のほうに向けた。

「ラーバル、悔しくねえのかよ！」

ラーバルはエルの手を払い落とした。

「バカ……悔しいに決まってるんだろ！」

ラーバルはエルの胸ぐらを掴んだ。

「だけど、それで泣き寝入りなんて、阿呆らしくてやってられっか！俺たちは泣くために村を出てきたのか！？」

エルは口をぽっかりとあけて聞いている。

「違うだろ、な。だから、泣いてる暇があったら、今日をどう生きるか、どうしたら勝てるのかとか、考えたほうがいいだろ」

ラーバルは、最後に優しい口調でそう言った後、エルを解放した。
「わかつたら涙と鼻水拭けよ、みっともない」

エルは急いで服の袖で顔をこする。

「さ、お金を取りにいこ！」

エルはいつもの調子で笑った。それを見たラーバルも笑う。

「そうそう、そっちのほうがおまえらしい」

二人はアイテムショップに向けて歩きだす。

「全部で2800ガルドになりまーす！」

可愛らしい少女が言った。エルは口がぽっかりと開いた。

「それだけか」

そう言ったラーバルに対して、おまえ何言ってるんだ！？ という顔を向けた。

「おまえ何言ってるんだ！？」

口に出して言う。

「は？」

まったくわからないと言った様子でエルのほうを向くラーバル。

「2800ガルドって、大金だぞ！ 俺の七カ月分の小遣いと同じなんだぜ！」

エルが指で七を数えて言った。ラーバルは頭を抱えた。

「おまえは……スケールが小さい！」

ラーバルはとりあえず少女からお金を受け取って、店を出た。

「あーあ、これじゃ新しい武器一つしか買えねえな」

ラーバルは財布代わりの革袋を見つめてつぶやいた。ため息をつ。

「しゃーねえ、俺の槍は後回しだな」

ラーバルはエルのほうを見た。エルが見返す。

「いや、俺のほうが後でいいよ。ラーバルが新しい武器買いなよ」

エルが遠慮するのだが、この二人は……。

「馬鹿いえ。おまえの武器を買ったほうが効率的だ」

「いやいや、ラーバルが買ったほうが戦力強化になるって」

「アホ、俺は今でもじゅーーぶん強いから今のままでいいんだよ」

「え、じゃあ何、俺のほうが弱いっていいいの？」

「当たり前だろ」

「こんの！ 言わせておけば！」

というふうな流れで口論戦になってしまふのである。

しばらくの口論戦の後。結局はエルの武器を買うことに決定した。

「いらっしやい」

物腰やわらかそうな老人がカウンターにいる。

「さつてと、自分にあうやつを探せ」

ラーバルに指示されて、渋々品定めを行うエル。

「んー、これ！」

エルは手に持っている剣を軽く振った。老人はにこやかにその様子を見ている。

「いいのかそれで。じゃ、これください」

ラーバルはカウンターに剣を置いた。

「うむ、2680ガルドじゃな」

老人は剣についている値札を取った。ラーバルは指定金額を払った。

「ふむ、確かに。毎度あり」

エル達は会釈したあと、店を出た。

「んじゃ、今日はここで宿を取るか」

武器屋からしばらくきたところにある宿の前に、エル達は立っていた。

「ふいー、俺もうくつたきた。早く休みたいー！」

エル達は宿へと入っていく。

宿の受け付けで部屋の案内を受け、入る。

「うわは！ ベッドだー！」

エルはベッドに向かってダイブした。ラーバルは椅子に腰掛ける。「宿の部屋も取ったし、近くに食堂があるらしいから行くか」

ラーバルの提案に喜んで賛成するエル。二人は部屋を後にした。

「これはいい、どんどん集まってくる」

シュトナは王城の廊下で、各部屋のドアを見ながら笑った。隣にいるフェルトは浮かない顔をしている。

「……ここに集められた人たちは、自分がどうなるか知らずに怯えている」

そうつぶやいたフェルトの肩を叩くシュトナ。

「大丈夫、本物の贄以外は解放するさ」

シュトナはその場を歩き去った。フェルトはドアをちらっと見た後、後味悪そうに重い足取りで、シュトナとは逆の方向に進む。

「……きちんと働いてもらうぞ、フェルト」

シュトナはそう言って、趣味の悪い高笑いをした。

「ふぁーあ、ねむー……」

外は完全に日が落ち、時計は九時を指していた。

エルはベッドに横たわり、布団を被った。

「じゃ、電気消すぞ」

そう言ってスタンド電気を切った。

「……なあ、昼間のやつ、一体なんだと思う？」

ラーバルが天井を見ながらエルに聞く。

「さあ？ でも、いいやつじゃなさそう」

エルは窓の外を見ながら答えた。

「……」

エルとラーバルは目を瞑って眠りについた。

第一章 四部（後書き）

グランダム 年齢67才 身長173cm 三人の詠唱士の
まとめ役。国王直属の詠唱士の一人。フェルトの尊敬する人物。

第二章 一部

「んあー、風が気持ちいいー！」

風が草原を揺らし、まるで緑色の海で波が立っているかのような中、エル達は進み続ける。

「油断するなよ。いっどこから魔物が襲ってくるかわかんないんだからな」

ラーバルがほほ笑みながら言った。

行く手には山脈が連なり、そのふもとには深々と緑に生い茂る森が見える。

「どうやら、あの森を抜けなきゃ先には進めないみたいだな」

ラーバルがそう言うのと、エルは目を輝かせて森を凝視した。

「すつつつげーいい感じー！ あそこだったら、見たことないような魔物とか出るかな！」

エルが興奮しながらラーバルに聞いた。ラーバルは少し考えた。

「でるぜ。人食い植物とか、鋭い角を持ったやつとか」

ラーバルは脅かすつもりだったのだろうが、逆効果だった。エルはさらに興奮して、今にも踊りだしそうな様子だった。

「うつひゃー！ 早くいいいこー！」

ラーバルは、地雷を踏んだなと後悔しつつ、エルに手を引かれるがままに走った。

「うわー……近くで見るとさらに不気味だ！」

エルは興奮の限界点に達しているようだった。なんとかなだめられないものかとラーバルは考えた。

「……無理だな」

二秒でその答えに辿り着いた。仕方なく森に入る。

「うわすっげ！　こんな植物見たことない！　あ、あっちの果物とかうまそー！」

エルはあっちこつちに飛び跳ね、植物を触ったり、出てきた魔物の『リプバード』等を倒しながら進む。

「こらこら、あんまりはしゃぐな。怪我でもしたらどうする……っ
ておい！　道を外れるなー！」

脇道に入ったエルを全速力で追い掛け、殴って道に戻すラーバル。
「ばっかやるー。もし危険な生物とかいたらどうすんだよ」

ラーバルは、首がフル稼働しているエルの頭を押さえて言った。
「大丈夫だつて。ここの魔物はそんな強くないし」

エルは、早くいろんなものが見たくてうずうずしているようだった。
た。

「だからよー、危険なものもあるかしんねーだろ？　たとえば……」

ラーバルは適当に一本の木を指差した。

「そことか！」

「きゃっ！」

エルとラーバルは一瞬、固まった。木の影で、少女がこちらを覗き込んで固まっていたからだった。

しかも、ただの少女ではなかった。

「み、耳が……」

その少女は頭に動物のような耳が生えていた。
少女ははっと我に帰ると、その場から逃げ出した。

「あ、行っちゃった……」

エルがつぶやく。かなりもったいなさそうに。

「あー、なんか驚かしちゃったみたいだな」

ラーバルが申し訳なさそうに言った。エルがラーバルのほうを向く。

「なあラーバル、あの子、なんで動物みたいな耳が生えてたの？」

エルは興味本位の目でラーバルを見つめる。

「あれはな、『キャットテイル』っていう人種だからだな」

ラーバルは思い出しつつ言った。

「昔に聞いたことあったんだけどよ、猫の遺伝子が組み込まれた人間が居たんだとよ」

エルが瞳を輝かせて聞いている。それを見たラーバルは得意になつて話を進める。

「ところがどっこい、そいつらは普通の人間嫌いだな、こういう森の奥や山の中に隠れ住むようになったわけだ」

「へー！ ラーバルすごい物知り！」

エルが満面の笑みで言った。ラーバルは、当然だと胸を張った。その時……。

「きゃあ……！」

遠くのほうから悲鳴が聞こえてきた。

「ラーバル、今の！？」

「ああ、悲鳴だ！ 行くぞ！」

二人は真剣な顔つきになって、悲鳴が聞こえた方向に走った。

「あ……いや！」

そこから少し離れたところで、先程の少女が魔物に襲われていた。必死に魔物の攻撃を避ける少女。

「こ、こないで！」

少女は叫んだが、魔物が止まるはずがなかった。次第に追い詰められていく少女。

「こないで！ ファイア・ボール！」

少女は詠術を使用して応戦するが、大した効果は得られなかった。とうとう大木の根元に追い詰められ、逃げる事がかなわなくなった。魔物が腕らしきものを振り上げ、少女は目を強く瞑って覚悟した、その刹那。

「突牙弾！」

魔物は真横から強力な突きを食らい、バランスを崩して倒れた。

「大丈夫!？」

エルは少女のもとに駆け寄った。少女は、全身に切り傷や擦り傷を負っていたが、致命傷はなかった。

「もう安心していいよ。俺らがあいつをぶっ飛ばすから」

そう言ってエルは立ち上がり、剣を構えた。ラーバルが後退りして横に並ぶ。

「気を付けるエル! やつは『ジュレイド』っていう中級の魔物だ!」

ラーバルが言った。エルはラーバルのほうに軽く頭を向けた。

「つまり、強いってこと？」

エルの言葉にうなずいて返事をするラーバル。エルは唾を飲み込んだ。

「行つくぞー!」

やはり真つ先に突っ込んでいったのはエルだった。ジュレイドは枝のような腕を、エル目がけて振るう。

「うわわ!」

思わずバックステップでかわすエル。正解だった。

「おい、やべえぞ! 範囲が広いうえに、一振りでこの風圧かよ! 防ぐなよ、弾かれるぞ!」

ラーバルが叫んだ。エルは再び突撃していくが、ジュレイドが腕を振り下ろしたためバックステップした。

「うわっ! じゃあどうすればいいんだよ!」

エルはジュレイドが飛ばすナッツショットを防ぎながら言った。

ラーバルは考え込んだ。

「やつの隙をつくしかない!」

ラーバルはジュレイドに接近し、ジュレイドの腕振りをかわした。

「今だ! たたき込め!」

ラーバルの合図で、エルは一気にジュレイドの懷に飛び込んだ。

「瞬突撃!」

一発目の突きでジュレイドの体勢を崩した。そして、二発目の助

走を付けた突きを華麗に決める。

リュウスイハロウショウ
「流水葉浪翔！」

突きからさらに上下左右の乱れ切りを繰り返した。

「ジュアアア！」

ジュレイドは、その枝についたすべての葉を散らして倒れた。

「た、倒した？」

エルが恐る恐る確認した。ジュレイドは微動だにしない。

「いよっしゃー！ 勝ったー！」

エルは飛び上がって喜んだ。あやうく剣が飛びそうになるほどに。

「やるじゃねえか」

ふーっと息を吐いて座るラーバル。少女のほうをちらつと見る。

「大丈夫か？」

少女はその問い掛けに、うなずいて答えた。

第二章 一部（後書き）

シュトナ 年齢26才 身長178cm 三人の詠唱士の一人。詠術の威力においては、他のどの詠唱士にも勝るほどの強者。国王直属の詠唱士の一人。フェルトとは同期。

第二章 二部

「あの、ありがとうございます」

キャットテイルの少女は、ぺこりと頭を下げた。

「いや、いいよ別に」

エルが笑って言う。ラーバルはジュレイドを槍でつついている。

「ラーバル、なにやってんだ？」

エルは不思議そうにラーバルに聞く。

「ん、売れそうな素材ないかなーって思ってよ」

ラーバルはつきまわすのをやめ、エル達のほうに戻る。

「ダメだなありゃ。死んだらただの木に戻るらしい」

ラーバルが、お手上げといった感じで手を肩の高さまで上げた。

「ところで、この近くに村があるの？」

エルが少女に聞いた。少女がうなずく。

「あります、けど」

少女が少しうつむいた。

「あなた方のような普通の人は……」

申し訳なさそうな表情で少女が言った。エルは頭と手を横に振った。

「あ、いやいや。このあたり危なそうだから、君を送ってあげようかなって思っただけ。余計なお世話、かな？」

エルは苦笑いしながらそう言った。少女は、意外なことを言われたため、少し驚いた顔でエルを見上げていた。

「い、いいえ！ 別にそんなことは……！」

言葉の途中で、茂みから魔物が出てきた。ラーバルがとっさに槍でついた。

「……お願いします」

少女は少し震えながら、頭を下げて言った。

「そう、わかった。おっとそうだ、自己紹介！ 俺エル、よろしく

！

エルが唐突に自己紹介を始めた。あまりにも突然だったために、少女はしばらく固まった。

「それで俺がラーバルっていうんだ。君は？」

ラーバルの一言で少女は我に返った。

「わ、私はフィルティナムです。あの、長いんでティナって呼んでください」

「OK。じゃ、ティナって呼ぶよ」

エルが笑顔で言った。少女ティナもつられて、少しだけ微笑む。

「んじやいこつか」

エルが歩きだす。二人もそれに続いた。

しばらくは、ティナがナビをしながら森を進んだ。途中、魔物が何回も出てきたが、三人で倒していった。

「へえー、ティナは詠術使えたんだ。すごいね」

最初の戦闘の後にエルが感心しながら言った。ティナは多少赤くなっていた。

「少しだけなら使えます。でも、すごくはないです」

ティナは恥ずかしそうに小さく言う。

「いやすごいよ！　だって、俺はいくら頑張っても使えないんだもん」

エルは興奮しながら言っている。ティナは少し引き気味だ。

「あ、ありがとうございます……」

とりあえず相槌を打つティナ。

ティナの詠術による援護は、戦闘を幾分か楽にしてくれた。

「あ、見えてきました！　あれが私の住んでる村『イルコ』です」
ティナがうれしそうに駆け出す。エル達も続く。

「結構静かだね」

エルが鑑賞しながら言う。ラーバルがうなずく。

「ああ。それに、空気もうまいしな」

二人して深呼吸をしていると、後ろから殺気を感じた。

「動くな！」

後ろから怒鳴られ、エル達は武器を出す寸前で止まった。怒鳴った者がエル達に近づく。

「貴様らは人間か」

後ろの男はエル達に剣を突き付けている。その様子に気付いたティナが折り返し、戻ってきた。

「まって！ その人たちは悪い人じゃない！」

ティナは、男とエル達の間に入った。

「どきなさいティナ！ こいつらは我々を迫害し続けている人間だぞ！」

男は怒鳴り散らす。ティナは首を横に振った。

「いや！ この人たちは、私の命の恩人なの！」

「何！？」

男はティナの言ったことに驚き、剣を下ろした。

「本当なのか？」

ティナは頭を縦に振った。男はいまいち信用ならないといった顔で剣をしまう。

「仕方ない。こうなったティナにはかなわないな。おまえ達、ティナに免じて許してやる」

男の一言を聞くや否や、ペタンと地面に落ちるエル。ラーバルは緊張がほぐれた様子で振り返った。

「ふう、ひやひやした。ありがとうティナ」

ラーバルは笑って言った。ティナは少し照れ気味でうなずいた。

「あー、力入んない。ラーバルー、助けてー」

エルが情けなく言う。ラーバルはしょうがねえなと呟き、エルの腕を引いて助け起こした。

「お父さん、二人に謝つてよ！」

この一言に二人は驚いた。

「お、お父さんー!?」

ティナの父親は、半分申し訳なさそうに、もう半分は非難するような顔をエル達に向けた。

「娘の命の恩人とはしらず、無礼なことをした」
頭を下げる父親。

「あ、いいですよ。元々、ここは俺らみたいなのが来るところじゃないですし」

ラーバルが頭を下げていった。そしてお互い頭をあげた。

「私はバラスコルス。スコルと呼んでくれればいい」

ティナの父親スコルは手を差し出した。ラーバルは握り、握手した。

「俺はラーバル、こっちはエル」

ラーバルが自己紹介した。その時、スコルはエルの名前に反応した。

「（エル？　どこかで聞いたな……）」

考え込むスコル。その様子を不思議そうに観察するラーバル。

「どうかしましたか？」

ラーバルの言葉ではっと我に返るスコル。

「いや、なんでもない。それより、先程の無礼を詫びたい。私の家で食事でもどうだ」

その言葉を聞いた瞬間にエルの腹が大きく鳴る。

「そっぴゃ、腹減ったー」

何とも間の抜けたエルを見て、スコルはすっかり毒気を抜かれた。みんなで笑う。

「それじゃあ私の家に案内しよう。村の者達には私から話を通そう」
スコルは村に向かい歩きだした。三人もあとに続く。

第二章 二部（後書き）

フェルトニニコラス 年齢21才 身長182cm 三人の
詠唱士の一人。気弱で、いつも不安そうな顔をしている。国王直属
の詠唱士としては、比較的詠術の威力が低い。古国語が読めるので
国王直属の詠唱士に選ばれた。

第二章 三部

「あーうまかったー！ ごちそうさまー」

エルが背中を伸ばしながら言った。

「ごちそうさまです」

ラーバルは行儀よく言った。エルは席から立ち上がった。

「ラーバル、村の中見て回ろうよ、ねえ、ねえ！」

エルがラーバルの腕をひっぱりながらねだった。ラーバルはめんどくさそうに腕を振りほどこうとしている。まるで幼い兄弟のようだ。

「村の者達にはおまえ達のことを言っておいたからかまわんが、問題はおこさんでくれよ」

エルはわかったとうなずいて、ラーバルを無理矢理引きつれて家を出た。スコルは不安そうにその背中を見送った。

「……不安だな。ティナ、一緒に行ってやれ」

「うん！」

スコルの言葉に、大喜びでうなずくティナ。エル達の後を追って家を出る。

「待ってください！」

ティナがエル達に走って追い付く。

「私が村の中を案内します！」

ティナが笑顔で言った。

「そう。じゃ、お願いするよ」

エルも笑って返す。

「じゃあ、アイテムショップはあるかな？」

ラーバルがティナに視線をあわせて聞いた。ティナはなぜか軽い屈辱感を覚えた。

「ありますよ。こっちです」

歩きだすティナに続くエル達。

「いやー、いいとこだねここ。空気はきれいだし、暖かいし」

エルは、この村の宿の部屋のベッドに寝転がる。ラーバルも椅子に座る。

「そうだな。まあ、村の人たちの冷たい目以外はな」

ラーバルは少し落ち込み気味に言った。エルがふとベッドから立ち上がり、窓の外を見る。

「ん？……ああ！」

エルが大声をだす。ラーバルが驚き、椅子から転げ落ちる。

「ど、どうした!？」

ラーバルはエルの元に駆け付け、同じく窓の外を見る。

「！ 白いローブ!？」

宿の前に人だかりができていた。その者達の見つめる先には、前にハリスルネスで戦った白いローブの者がいた。

「ラーバル！」

エルが剣を手に掴み、ラーバルを見た。ラーバルもうなずいて槍を手に取った。そして、二人揃って宿を出た。

「おい、待て！」

エルが、去ろうとするローブの者を呼び止めた。ローブの者は、今まさに一人の男の子を連れていこうとしていた時だった。

「あら？ 何かしら？」

ローブの者はどうやら女性らしかった。透き通った声で返事を返した。

「あれ？ 前のと違う人だ」

エルは少し戸惑った。

「てめえ、その子を放せ！」

ラーバルがエルの代わりに、ローブの女性に言った。女性はくすくすと笑った。

「あら、威勢のいい子達ね。わかったわ、この子を放してあげる」

ラーバルは警戒した。普通は素直に言うことを聞かずにいるからである。

「フフフツ……」

女性が微笑んだ次の瞬間、エル達の体を水の玉が包んだ。

「嘘でした」

楽しそうに言う女性。

「くっそー！ だせー！」

エルが水の玉を剣で切り付けるが、割れなかった。

「うふふ、無駄よ。私の特別製の詠術なんだから」

女性は笑った。エルは必死にもがいて抜けようとしている。ラーバルは女性を睨み付けている。

「なかなかおもしろいことをしているじゃないか、サト」

女性の後ろから、詠唱士らしき男が来た。男も笑っている。

「シュトナ様」

サトと呼ばれた女性が頭を下げる。シュトナが手で合図をすると、頭をあげた。

「シュトナ様、なぜこのようにここにこられたのですか？」

サトがシュトナに尋ねた。

「ん、視察に来たのさ。君達がどれくらい頑張っているのかを見にね」

シュトナが、顔の前に垂れ下がる茶髪をかきあげながら言った。

「そうですか。大丈夫ですよシュトナ様。私たちはあなたのご意志に従っております」

サトは胸に手を当てて頭を下げた。

「そう、それならいいけど。頑張ってたね」

シュトナは楽しそうに手を振りながら言った。

「ああそうだ、その子達、ヤッチャっていいよ」

シュトナはエル達を指差しながら言った。そして、高笑いしながら消えた。

「だって。残念だったわね君達」

サトは笑った。笑いながら左手をエル達に向ける。

「ちつくしょー！」

エルが叫んだその瞬間、火の玉が飛んできて、エル達を包んでいた水の玉を蒸発させた。

「！？」

エル達とサトが同時に火の玉が飛んできた方向を見た。そこにはスコルが立っていた。

「大丈夫かおまえ達！」

スコルはエル達に駆け寄った。その後ろからティナもついてきていた。

「スコルさん、助かりました」

ラーバルが立ち上がりながら言った。

「ありがとうスコルさん！」

エルは飛び起きながら言った。サトは不満そうにその様子を見ていた。

「あたしの特別製の詠術を破るなんて、なかなかの使い手じゃない」
サトは捕らえていた男の子を解放した。

「でも、私には勝てないわよ！」

サトは左手をスコルに向けた。すると、左手の手の平の少し前の空間から水が吹き出した。

「危ない！」

スコルは後ろの三人を横に突き飛ばし、自分は水流を食らって宿の壁に激突した。

「ぐわ！」

スコルはそのまま気絶した。サトは笑った。

「お父さん！」

ティナがスコルに駆け寄る。エル達は武器を構えた。

「あら、私とやる気？」

サトは挑発的に言った。

「ああ、やってやる！」

第二章 三部（後書き）

フェルティナ 年齢15才 身長123cm キャットテイルの少女。明るく行動的な性格で、これと決めたことはやり抜く。詠術増強石を使ったネックレスのおかげで、詠術を使用しての戦闘ができる。ネックレスがない場合は、焚き火を起こす程度しかない。

第二章 四部

「あら、威勢たつぷりね」

サトは左手をエルに向ける。エルはとつさに剣を振る。すると、パチンツという小さな音が聞こえた。

「同じ手を二度も食らうか！ わかってるんだぞ！ 小さな泡が飛んできて、それが大きくなって俺たちを包んだってこと！」

エルが再び剣を構え直しながら言った。サトは少し焦った。

「や、やるじゃない」

サトは焦りを押さえた。冷静になり息を一つ吐いた。

「まあいいわ。殺しの許可はあるし、遊んであげる」

サトは余裕を取り戻し、指をクイクイツと曲げのばして挑発した。

「エルさん、私も加勢します！」

ティナがエル達のほうに駆け寄って、きれいなネックレスに手をかざした。

「行くぞ！」

エルが真っ先に突っ込んでいった。ラーバルもあとに続く。ティナのネックレスが輝きを放つ。

「フレイムアロー！」

ティナが三本の炎の矢を放った。しかし、サトはローブをひるがえし防いだ。

「うりゃあ！」

エルも切り掛かるが、ひらりと避けられた。

「突牙弾！」

ラーバルが突きを放った。しかし、かわされる。

「ダメだ、全然あたんだない！」

サトの投げたナイフを弾きながらラーバルの隣に移動するエル。

「どうすればいいんだ！？」

エルがそう聞くと、ラーバルは少し考えた。

「ほらほら、考えごとしていると殺しちゃうわよ」

サトは左手をエル達に向ける。

「我が手に集いし水の精達よ。その力、示さん！ アクアブレス」

サトの左手から水流が発生し、エル達目がけて進む。

「ちっ！」

ラーバルはエルの前にでて、槍を横にして水流を防いだ。

「フフツ、いつまで耐えられるかしら？」

サトは水流を発生させながら笑った。ラーバルは歯を食い縛って耐えている。

「ぐっ！」

手が痺れてくるラーバル。だが、口の端を釣り上げた。サトはその様子を見て、エルの姿を探した。

「……い、いない！？」

サトは左右を見たが、エルの姿はなかった。

「うりゃあ！」

頭上から声が聞こえた。サトが上を見ると、エルが視界に入った。

「うそ！？」

サトはとつさに後ろに飛び退いた。エルの剣が地面に突き刺さる。

「やるじゃな……！？」

さらに追加でラーバルが突っ込んできた。

「突牙弾！」

ラーバルは槍を突き出す。ロープをひるがえし防ぐサト。槍が口
ーブに当たり、サトが後ろによろめく。

「まだまだ！ ミエツガタン 三重突牙弾！」

ラーバルはそこから高速三連突きを放った。サトはロープで防ぐが、体勢が大きく崩れた。

「くっ！」

足を後ろに出して転倒を防止するサト。

「今だエル！ 叩き込めえ！」

ラーバルの合図で、ラーバルの脇を通り抜けてサトに突撃するエ

ル。

「うおお！ 縦振斬！」
ジュウシンザン

エルは軽く上に飛び、縦一文字に切り付けた。

「くは！ 何！？」

サトはローブで防ぐが、重い一撃に弾かれた。

「食らええ！ 流水葉浪翔！」

エルは上下左右切りを放つ。

「くうつ！」

サトはなんとかローブで防いだ。だが、バランスを大きく崩した。その時、ティナのネックレスが眩しいくらいに輝いていた。

「炎よ、灼熱の渦となり、焼き尽くせ！ バーストーム！」

ティナが呪文を唱え終わると、炎の渦がサトを包んだ。

「あああああ！？」

サトはローブをひるがえそうとしたが、バランスを崩していたためにできず、炎の渦に吞まれた。

「す、すげえ！」

エルはその光景を目の当たりにし、驚きつつも興奮していた。

少したつと、炎の渦はすぐに消えた。あとには、所々焦げたローブを身にまといているサトだけが残っていた。

「……く、まだよ……」

サトはふらふらと立ち上がった。エルは身構えた。

「まだ、負けたわけじゃ……ない……」

サトは二、三步エルに近づいた後、倒れた。

「か、勝ったああ！」

エルは両手を上に挙げた。ラーバルはその場に座り込み、ティナは父親の元に戻る。

「お父さん！ お父さん！ しっかりして！」

ティナは父親を揺さぶった。

「う……んん」

スコルは意識を取り戻し、起き上がる。

「よかった！ お父さん！」

ティナは起き上がったスコルに抱きつく。スコルは少しぼーっとしていたが、はっと我に返った。

「ティナ、大丈夫か？」

スコルはティナを離すように肩を掴んで言った。ティナはうなずいて返事を返すと、再び抱きついた。

「よかったなティナ。つとと、サトを縛っておかなきゃな」

ラーバルは、村の住人にロープを貰い、サトを縛った。

「ありがとう、おまえ達。おまえ達がいなかったら、あの子は今頃

……」

スコルはティナの肩に手を置きながら言った。

「いや、当然のことをしたまでさ（でも、倒したのはティナなんだよな……）」

うれしさと羨ましさが入り交じった苦笑いをしながらエルは言った。

「ところでスコルさん、サトはこの後どうなるんだ？」

ラーバルが腕を組みながらスコルに聞いた。スコルは少し暗い表情になる。

「我らの掟に従い、この村に害をなそうとしたその者を処刑する」それを聞いたエルが驚きの表情をした。

「ちよつと待つてくれ！ 処刑なんて、やめてよ！」

エルが大声で言った。ラーバルが仕方ない、と言った様子でエルの隣に並んだ。

「あいつに、改心の余地くらい与えてやってもいいだろう」

「駄目だ！」

ラーバルが言い終わると同時に、一人の男が言った。

「人間がそう簡単に改心などするはずがない！ その人間はすぐさま処刑するべきだ！」

男がそう言っていると、そうだとそうだと賛同するものが表れてきた。

「頼む！ 一度だけチャンスをくれ！」

エルが頼み込むが、聞き入れてはもらえなかった。

次第に処刑するべきというほうに賛同者が増えていく。エルはなんとか止めようとしたが、子供一人の力ではどうにもならなかった。

第二章 四部（後書き）

バラスコルス 年齢37才 身長180cm ティナの父親。
昔はかなり荒れていたが、今はある男のおかげで穏やかに過ごして
いる。力はかなり強く、戦闘術にも長けているので、村の守衛をし
ている。

第二章 五部

「みなよ、まて」

老人の落ち着いた声が聞こえた。その瞬間に、まるで時が止まったかのように静かになる村の者達。

「村長！」

スコルが老人の元へ寄る。

「その者達の言葉を信じてみようじゃないか」

村長である老人がそうつぶやいた。まわりがざわつきはじめる。

「しかし村長、あのローブの者は男の子を連れ去ろうとしたのですよ！」

先程から処刑を強く訴えている男が、サトを指差しながら言った。村長は男に手をかざし、落ち着くようになだめる。

「……三年前の話じゃ」

村長は杖に手を掛けると、ゆっくりとした口調で話し始めた。

「その頃、このバルスコルスは、村一番の暴れ者じゃった」

村長がそのことを言うと、スコルは恥ずかしさで顔を赤らめ、伏せた。

「そして、ついに村の者に重傷を負わせ、掟により処刑されようとしていた」

エルとラーバルは驚いた。スコルはかなり真面目なふうに見えたため、そんなことがあったのかと我が耳を疑った。

「その時じゃった。あの人間の男がこの村を訪れたのじゃ」

村長は楽しい思い出に浸るかのような表情で続けた。

「その者は、処刑されようとしている父親に泣きすぎる娘を見て、処刑をやめさせようとしていた。その者は我らに、改心の余地ぐらい与えろ！　と言って、鬼人のごとき剣技で村の強者どもを薙ぎ倒し、スコルを連れて森へと駆け込んだのじゃ」

村長はそこまで言うと、スコルに目で合図をした。それを読み取

ったスコルが続ける。

「あいつは、俺を解放したあと、思いつきり殴ってきた」

『いってーな、なにしゃがる！』

スコルは立ち上がり、男と睨み合う形で怒鳴った。男はスコルの胸ぐらを掴んだ。

『馬鹿野郎！ どんなことがあったか知らねえけどよ、あんな若い娘を悲しませてんじゃねえ！』

そう言つて男はスコルを殴った。

『よそものてめえには関係ねえ！』

スコルは思い切り男の頬を殴った。

『……ふっふふ』

男は殴られた頬を押さえながら笑った。

『おまえの拳はバカ正直だな。死にたくねえって言ってるぜ』

スコルはどきつとした。その動揺を隠すために再び殴った。

『こんどは、娘を泣かせたことを後悔してるぜ』

男は笑顔で言った。スコルは足の力がなくなつたかのようにその場に座り込む。

『ただだぜ、落ちるには早すぎる。もつと語ろうぜ』

そう言つて男は、拳をスコルに向けて突き出した。

『あんだ、いったい……』

スコルは、口の端から流れていた一筋の血を拭い、立ち上がった。そして、そこら一帯に語りあいの証拠である打撃音が鳴り響いた。

「そして俺は、その男と一緒に村に戻り、二度と過ちを犯さないと誓い、村の者達から許しを得た」

スコルは語り終えると、エルのほうをみた。

「やってみせてくれ。おまえは、おまえの目は、あの男に似ている」
スコルがそう言うと、エルは軽くうなずいた。

「……ん」

サトが目を覚ました。エルが歩み寄った。

「大丈夫？」

エルが笑顔で聞く。サトはエルを睨みつけた。

「……なんで私を生かしたの？」

サトはエルを睨みながら尋ねた。

「いや、やつぱりさ、人が死ぬのってあんまり後味よくないしさ。
それに、死にたくないでしょ？」

エルがそう言うと、サトは目を閉じた。

「フツ、敵にそんな同情をかけるなんて、あまいわね」

サトはふらつと立ち上がった。次の瞬間、詠術を使用して、自分を拘束しているロープを引きちぎった。

「それが命取りよ！」

サトはすぐさま左手をエルに向けた。不意を突かれ、体勢を崩す

エル。

「死になさい！」

「そこまでだ、サト」

サトと、若い男の声が同時に響く。サトは振り返った。後ろには、空間の歪みができていた。

その歪みの中から、一人の青年が出てきた。

「フェルト様!？」

すぐに敬礼の体勢をとるサト。エルはその場にしりもちをついている。

「サト、君に伝言がある」

フェルトはサトに歩み寄った。サトは不思議そうな顔をした。

「シュトナが、君を解雇するそうだ」

フェルトがそう言うと、サトは驚いた表情で固まった。

「そ、そんな……嘘でしょう!? フェルト様!?」

サトの問い掛けに、首を横に振って答えるフェルト。

「君よりも成績のよい人材があらわれたそうだ。それで、シュトナは君を不必要と判断したらしい」

フェルトがそう言うのと、サトはフェルトにすがった。

「そんな! チャンスを、私にチャンスを!」

フェルトは、すがってくるサトを哀れみの目で見つめ、目を閉じる。

「ボクもシュトナに、君にチャンスを与えるよう説得したが……」

フェルトはしばらく間を置いた。不意に拳に力を込める。

「役に立たないものはすぐに捨てる。あいつは、シュトナはそういうやつだ」

フェルトは怒りを込めて言った。サトは地面に崩れ落ちた。フェルトは視点をあげてエル達を見た。

「君たちが、ハリスルネスでモトリと戦ったというのは」

フェルトはそう言うのと、歪んだ空間に向かって歩きだした。

「……また、会おう」

そう言っただけに入っていく、歪みはフェルトが入りおわると消えた。

第二章 五部（後書き）

サト 年齢不明 身長168cm シュトナの部下。水の詠
術を使いこなす。本人がその気になれば、小さな湖を作り出すこと
も可能。シュトナに尊敬の意を抱く。

第二章 六部

「……」

無言のまま、サトは地面に突っ伏している。エルはどうすればいいかわからず、地面に腰を下ろしたままである。

「……あの」

エルがやっと一言放つのと同時に、サトが立ち上がった。

「……この村は、かんばつの被害に会ってるんですか？」

サトがそう言つと、スコルがうなずいた。

「そうなの？」

エルが聞くが、軽く無視された。かわりにラーバルが、そうなんだと答えた。

「なぜ、わかった」

スコルがサトに聞いた。

「地下水の流れで、それくらいはわかるわ」

そう言つとサトは、村の外に向かって歩き始めた。

「どこに行く気だろ？」

エルはおもむろに立ち上がり、サトの少し後ろを歩いて付いていく。村の者達もぞろぞろと続いた。

しばらく歩くと、干上がりかけた湖に到着した。

「貴様！ 我らの大切な水源に何をするつもりだ」

男がサトに向かっていこうとすると、スコルがそれを阻止した。

「成り行きを見ようじゃないか」

スコルがそう言つと、男はすぐごと下がった。

サトは両手を開きながら湖にかざした。次の瞬間、サトの両腕のあいだに詠術の力の結晶体である『フォースジュエル』が現われた。
「くっ、はあああ！」

サトはその結晶体を、湖の中心に向けて飛ばした。

結晶体は湖の中心の上で止まり、輝き始めた。すると、あたり一体が振動しはじめた。

「な、なんだ！？ 何が起こっているんだ！？」

男はあわてふためき、視線をあちらこちらに飛ばす。

「あ、あいつが何かしたのか！ やはり生かしてはおけない！」

男は迷わせていた視点をサトに絞り、駆け出した。スコルが止めようとするのより早くに。

「よせ！」

スコルがそう叫んだ瞬間だった。一揺れ大きいのがあたりを襲い、サトに向かって駆け出した男は足元をすくわれた。

「はあ！」

サトが大きく気合いを入れると、湖の中心が大きく盛り上がり、弾けた。

「うつわすつげ！ 水が吹き出した！」

エルが楽しそうに、物凄い爆音を立てて立ち上がる水柱を見上げた。

少したつと、水柱は湖に沈み、辺り一帯に一時的な雨を降らせた。
「はあ、はあ…… 今、水脈をこの真下に移したから、もうかんばつの心配はないわ」

サトはそう言うのと、振り返って地面に伏した。

「あのようなことをしてすみませんでした！ 国王軍を解雇されてしまい、今は行くあてもありません。お願いします、この村に置いてください！」

サトは、土下座の体勢を取り、必死にそう言った。
「馬鹿を言うな！ 貴様のような人間をこの村に住まわせるものか！」

男は怒鳴り散らした。だが、村長がそれを制した。

「なあスコルよ、こやつのおまえの一存で決めようと思うのだが、どう思う？」

村長はスコルを見た。スコルは何の迷いもない目で村長を見返し、そのままサトを見た。

「この者は嘘はついていないでしょう。幸い、大した損害もないわけですし。それどころか、かんばつの危機から救ってくれたわけですから、許してもよいかと」

その一言に不服の表情をする男と満足気の村長。

「よかるう。サトとやら、おぬしの行い、許そう」

村長は笑顔で言う。サトはその言葉に涙した。

「ありがとうございます」

その様子を見て微笑み、誰にも気付かれる事無く立ち去る二人組。

「よかったなー、処刑されなくて」

村から結構離れたところで、背伸びをしながらエルが言った。

「そうだな。それより、スコルさんやティナちゃんになにも言わないできて、本当によかったのか？」

ラーバルがエルに尋ねた。エルはうなずいた。

「うん。だって、別れるのってさ、なんか恥ずかしいじゃん」

エルは照れ笑いしながら言った。ラーバルも納得したかのようにうなずいた。その時……。

「待つてくださーい！」

後方からティナの声が聞こえてきた。エル達が振り向くと、ティナは木々の間を縫うように走ってきて、目の前で止まる。

「ティナちゃん!？」

エル達は驚き、同時に言った。ティナは輝くほどの笑顔を向ける。「ひどいじゃないですか! 何も言わずに行っちゃうなんて」

ティナはふうつと息を吐き、背筋をのばした。よく見ると、背中にカバンを背負っている。

「ええと……改めまして、私はフェルティナです! ティナって呼んでください!」

ティナは元気よく言った。エル達はその意味を素早く察知した。
「ああ、そゆこと。んじゃ、俺はエル、エル〓キュアリス、よろしくティナ」

エルは笑っていった。ラーバルは仕方ないといった様子で肩の力を抜いた。

「俺はラーバル〓ライナスだ。んで、スコルさんに許可を得て来るのかい？」

「うん、黙ってきちゃった」

笑って首を横に振りながらティナが言った。ラーバルが呆れた様子で頭を抱えた後、三人で笑った。

「まったく。親に何も言わずに飛び出すなんて、誰に似たのか」

スコルは森の方を見ながらつぶやいた。その隣に並ぶ村長が、おぬしに似たんじやと言うと、スコルは顔を赤くした。

「……思い出した」

スコルはぼつりとつぶやいた。

「エル、どこかで聞いた名前だと思ったら、あの男が自慢げに話していた息子の名前だ」

スコルがそう言うと、思い出し、納得したように村長がうなずく。

「そつえばそうじゃの。他人のために必死になるとこも、あの真つすぐな瞳も、すべてあの男譲りじゃな。カーカッカッ！」

村長は笑った。スコルも顔を崩して笑う。

「おまえの息子は、おまえに似ているぞ、ゼディウス〓キュアリス」

スコルは目を閉じ、男の顔を思い出す。

脳裏に浮かんだ顔は、笑っていた。

第二章 六部（後書き）

ゼディウスⅡキュアリス 年齢39才 身長193cm エ
ルの父親。エルがまだ一歳にも満たない時に家を飛び出した。なぜ
そうしたかは不明。現在、どこに居るのかも不明である。エルに負
けず劣らずの能天気家らしい。

第三章 一部

「うわー！ 広ーい！」

ティナは草原に向かってそう叫んだ。

「広ーいって……まさか、あの森から出たことないのか？」

ラーバルがそう聞くと、ティナは勢い良くうなずいた。

「うん！ なんだかすつごくわくわくします！」

ティナがうれしそうにそう言くと、エルは不機嫌そうな顔をした。

「なーんか、しつくりこないなー」

エルはティナに聞こえるようにつぶやいた。ティナはエルに振り返る。

「ティナ、そのしゃべり方やめようよ」

エルはつまらなそうに言った。

「え？ どうして、ですか？」

ティナは不安そうな様子で聞いた。エルは笑ってティナの顔を見た。

「だって仲間だろ、俺たち」

エルは頭の後ろで手を組んだ。ラーバルも笑う。

「そうだな。仲間同士でそんな他人行儀じゃ、息苦しいぞ」

ラーバルは軽くティナの肩を叩いた。ティナの顔が徐々に赤くなっていく。

「……いいの、かな？」

ティナが顔を真っ赤にしながら尋ねた。エルとラーバルは微笑んでうなずいた。

「……エル……ラーバル……」

ティナの口から『さん』を付けない名前が聞こえた。

「うん、そっちのほうがいいな。さん付けだと、何となくムズムズするんだよな」

エルがうれしそうに言った。

「よし、これでティナは俺たちの、本当の仲間になったわけだ」
ラーバルはティナを担ぎ上げて肩に乗せた。ティナは持ち上げられた時は小さい悲鳴を上げたが、すぐに笑いだした。

く王城く

「シュトナ！」

フェルトが扉を開き、部屋の中にいるシュトナに駆け寄った。

「んー、どうしたんだい？ そんなに血相変えて」

からかうかのようにシュトナは言った。紅茶をすすする。

「どういうことだ！？ 適格者以外は解放するんじゃないかったのか！？」

フェルトはシュトナの胸元を掴んだが、シュトナは軽く振り払った。

「予定が変わったのさ。この計画が城の外に漏れると、国民が混乱してしまうだろ？」

シュトナは冷静に言った。フェルトはシュトナを睨み付けている。シュトナが呆れたような素振りを見せた。

「大体、この命を下したのはグランダムさ。俺に当てられても困る」
フェルトは、グランダムという名前には弱かった。シュトナを睨むのをやめ、部屋を出ていく。

「……妙に正義感の強いやつだなあ。そろそろ消したほうがいいかな？」

シュトナは冷静に言うと、紅茶をすすすった。

「あれが、街？」

ティナが驚きの表情で指を差した。その指の先には、港町『クルーズヒスト』があった。

「ああ、このクルーズヒスト地方の港町だ。あの街は、海に向こうの『ガーランド』地方と貿易をしてるんだ」

ラーバルが自慢げに言った。無論、エルとティナが誉め讃える。

「とりあえず、腹減ったー！ 早く行つて飯食おうぜ！」

エルがクルーズヒストに向けて走りだした。

「しゃーねえ、行くぞティナ！」

ティナを肩に担ぎ上げ、走りだすラーバル。ティナはラーバルの上ではしゃいだ。

「ぶっはー、食ったー！」

エルは満足気な顔をして椅子に座り込んだ。ラーバルとティナも満足気である。

「海鮮類が特にうまかったな。さすが港町だ」

ラーバルはそう言うのと立ち上がり、カウンターへと向かった。そして支払いを済ませ店を出る三人。

「……なんだか、変な臭いがする」

しばらく街を見て回っていると、ティナが突然止まりそう言った。

「ああ、たぶん潮の匂いだな」

ラーバルは海の方を見ながら言った。しかし、ティナは首を横に振る。

「違うの。……なんだか、何かが腐ったみたいな、気持ち悪い臭いなー！」

とうとうティナは鼻を押さえてしゃがみこんだ。

「大丈夫？」

エルがティナの背中を撫でながら聞いた。ティナは首を横に振る。

「……確かに、臭う」

ラーバルも鼻を押さえた。

「どんな臭い？」

エルは思い切り息を鼻で吸い込んだ。すると、突き刺すかのような腐敗臭が鼻孔に広がった。

「うげえ！？」

吐き気をもよおししゃがみこむエル。どんどん強まっていく臭気。
「うく……」

ティナは倒れた。キャットテイルの嗅覚は、普通の人間の約1・7倍なので無理はない。

「ティナ、エル！　っだあ！」

ラーバルは一気に二人を担ぎ上げてその場を逃げ出した。

街の中央の噴水まで来た。街の人々は、あの謎の腐敗臭の話をしていた。

「大丈夫か、ティナ？」

ラーバルは背中を撫でながら尋ねた。

「あう……うん」

力なくうなづくティナ。エルは目も向けられない状態だ。

「あ……昼飯が出た……」

ラーバルはとりあえず、その状態のエルをティナに見せないように努力した。二次災害を避けるためだ。

「しかしなんだったんだ、あの臭いは」

ラーバルは立ち上がった。

「こういうときは、人に聞いてみるのが上策か」

そういうと、話をしている住人達に歩み寄った。

「すみません、ちょっといいですか？」

ラーバルが声を掛けると、話をしていた男三人組が振り返った。

「なんだい？」

一人が聞き返してきた。

「港付近のあの腐敗臭はなんなんですか？」

ラーバルが聞くと、三人は首を横に振り、俺たちにもわからないと言った。

「ついさっき、突然臭い始めたんだ。俺らは耐えかねたからここに逃げてきたんだ」

男が言う。

「こんなこと、今まで一度もなかった」

もう一人の男が言った。

「……」

あと一人の男は黙っている。

「そうですか。ありがとうございます」

ラーバルは礼を言っ、エル達の下に戻った。

「大丈夫そうか、二人とも？」

ティナはぐったりとうなずき、エルは親指を立てて返事をし、再び嘔吐した。

「……宿に行くか」

ラーバルは仕方ないといった顔でつぶやくと、エルを立たせてティナを背負った。そして宿を求めて歩きだした。

第三章 二部

「うえー。気持ちひはふい……」

エルはベッドでぴくりとも動かずにつぶやいた。もはや後半は聞き取れないほどだ。

「しかし、あの臭いはなんだったんだ？」

ラーバルはエルを見た。見た感じは重傷である。顔色は悪く、ぐったりとしている。ティナは多少回復したようで、顔色は悪くはなかった。

「……なあティナ」

ラーバルがティナに声を掛ける。ティナは頭だけをラーバルに向けた。

「俺はもう少し様子を探ってみる。エルを頼めるか？」

ティナはうなずく。ラーバルがエルの方を見ると、エルは寝息を立てていた。

「頼むぜ。行ってくる」

ラーバルはそう言って部屋を出た。

「んじゃ、まずはあそこに戻ってみるか」

ラーバルは港へ向かって歩きだした。

「うえー！ やっぱきついな……」

ラーバルは布で鼻と口を押さえながら港付近を歩く。それでも臭気は緩和されなかった。

「付けても付けなくても変わんねえか。くせえ」

ラーバルは布をポケットにしまった。

「やっぱし誰も居ないな」

辺りを見回し、独り言をつぶやく。そして、後ろから気配を感じた。

「……一体どなた様だ？ 人間じゃ、ねえな」

言い終わると同時に振り返り槍を構えた。

振り返るとそこには、ヘドロが固まって人の形を作っているという、なんとも奇妙な光景が広がっていた。

「臭いの原因はてめえらか！」

ラーバルが叫ぶと、ヘドロ達は一斉に襲い掛かってきた。

「やろうつてのか、上等！ 行くぜ！ 断地離^{ダンジリ}！」

ラーバルは勢い良く槍を地面突き刺した。そして地面をえぐって大きめの塊を作り、槍で殴り飛ばした。それがヘドロ達をはね飛ばす。

「見たか！」

だがヘドロは止まろうとはしない。

「ちっ！ 弧破双槍！」

槍を左右に払い、二丁三匹をまとめて叩くが、ヘドロは構わず進んでくる。

「うわわ！ 来るな来るな！」

槍を目茶苦茶に振り回し応戦したが、次第に追い詰められてきた。

「く、数が多すぎるな……」

ラーバルはヘドロ達を睨み付けながら後ろへ後退りする。

「助太刀致す！」

突然そんな声が聞こえ、列の一番後ろのヘドロが四匹ほど切り裂かれた。

「！？ 誰だか知らないが助かる！」

思わぬ援軍が現れたことにより、ラーバルは気力を取り戻し、再び槍を強く握った。

「そっちの半分は任せるぜ！」

「承知！」

こうしてラーバルと加勢者の二人により、ヘドロ達はすべて片付けられた。

「はぁ……ありがとう」

ラーバルはそう言って、助けに入った人物を見た。
「いや、当然のことをしたまでじゃ。礼には及ばぬ」

その人物はやさしく笑い、武器を鞘に収めた。ラーバルはその人物の顔を見て驚いた。

「お、女の子!？」

ラーバルは驚きで口が開きっぱなしになった。無理もない。あれだけの数の敵を相手にしたのだから、相当な使い手だろうと思っていたら、実際はエルと同じくらいの少女だったのだから。

「なんじゃ、我はそんなに珍しいか？」

少女は不機嫌そうに眉間にしわを寄せた。

「あ、いやいや！　ただちよつと驚いただけだ」

ラーバルは手と頭を左右に振りそう言った。

「そうか、ならいいが」

少女はそう言うのと、ラーバルの方へと歩み寄った。

「おぬし、なかなかやるのう。名をなんと申す？」

少女が微笑みながら聞いてきたが、ラーバルは何を聞かれたのかわからず、固まった。

「ああ失礼。なんという名前なんですか、じゃな」

少女がそう言うのと、ラーバルはそうかと納得した。

「俺はラーバルだ。おまえは？」

「我はジュンという」

ラーバルが聞き返すと、少女は答えた。

「そうか、ジュンか」

ラーバルはそう言った後、近くにあつた倉庫に視線を移した。

「さっきのヘドロは、あそこから出てきたみたいだな」

ラーバルがそう言うのと、ジュンも倉庫を見た。

「……邪悪な殺気を感じる。何かある」

ラーバルとジュンはその倉庫に近づいていった。

「って、なんでおまえまでついてきてんだ？」

ラーバルがジュンに振り返って聞くと、当然という顔でラーバル

を見返した。

「我もこの事態を放つてはおけんのじゃ。微力ながら、おぬしに協力致す」

ラーバルはうれしいやら苦いやらの妙な気分になった。腕の立つジュンと一緒に来るのはありがたいが、同時に少女を危険にさらす事になる。

少し迷った後、決断を下した。

「ヤバいと思ったらすぐに逃げるか、俺に頼れよ」

そう言つと、ジュンはうなずいた。

「んじゃ、行くぞ！」

ラーバルは倉庫の扉を開いた。中に進む。

「かなりの臭気じゃな。呼吸するのが辛い」

ジュンは眉をひそめて言つた。

「エルとティナを連れてこなくて正解だったな」

ラーバルは苦笑いし、わずかな吐き気を押さえ込んだ。ジュンも同じような状態だろう。

「何もないようじゃな」

わりと広めな倉庫の中心に立つて辺りを見回した。あるものといえば、積み重ねられた貨物と木材くらいだった。

「いや、あるぜ。こことかよ」

そう言つとラーバルは倉庫の隅へと行き、床を踏み付ける。すると、バンツという板を踏み付けたような音が聞こえた。

「ほらこの下、空洞だぜ」

そう言つてその床を槍でこじ開けた。床の隙間に槍の矛先が入ると、ラーバルは一気に持ち上げた。床板は見事に外れ、地下へと続く階段が姿を表わした。

「うわっクサ！」

そう言つて後ろに飛び退くラーバル。辺りに立ちこめる臭気がより強くなった。

「うっ！？　こ、これでは……」

ジュンも後退りをする。

「どうにかなんねえかなー」

ラーバル達は倉庫の入り口まで下がってきた。その時……。

「やっほ！」

後ろから気の抜けた声が聞こえた。ラーバルが急いで振り返ると、エルとティナが倉庫入り口前に立っていた。

第三章 二部（後書き）

ジュンタチバナ 年齢16才 身長165cm イースト
インド地方出身の少女。自己主張が強い。カタナというイーストエ
ンド独特の武器を使う。服装は、エル達から見れば奇妙なものであ
る。

第三章 三部

「エル、ティナ！？　なんでここに！？」

ラーバルは驚いていた。宿に置いてきたはずのエルとティナがいたからだ。

「止めたんだけど……」

ティナが申し訳なさそうに言った。

「ラーバルだけずるいぞ！　俺だつてやりたいんだよ！」

エルが満面の笑顔で言う。ラーバルは呆れて力が抜ける。ジューンはいまいち状況が飲み込めていなかった。

「そつえば、おまえら平気なのか？　この臭い」

ラーバルがそう聞くと、エルは思い出したようにはつとした。

「そうそう、ティナが臭いを無効化してるんだ。だから平気だよ」

そう言われて、ラーバルは臭いがなくなっていることに気が付いた。

「本当だ、全然臭わねえ」

「こやつら、おぬしの仲間か？　すごいのう」

ジューンが感心しながら言った。エルとティナがジューンを見る。

「……誰？」

エルが首をかしげながら尋ねた。

「ああ、これはすまぬ。我はジューンというものじゃ。おぬしらは？」

ジューンが促すが、エルとティナはまったくわからないという顔をジューンに向けた。

「ん、つまり、おまえ達の名前を聞いてんだ」

ラーバルは立派に通訳した。二人は納得する。

「あーあ。俺エル、よろしく！」

「私はティナです」

ジューンはうなずいた。

「さあ、自己紹介も終わったことだし、さっさと行こうぜ」

ラーバルがそう言うと、三人は倉庫の隅の階段を見た。

「……行こうぜ」

エルは興奮を抑えきれず、顔にだしながら言った。

「あー、やべえ……エル、勝手に進むなよ！」

ラーバルの警告はもちろん無視。スタスタと進む。

「行つくぞー！」

「コラー！」

エルを追い掛け、三人が続く。

「うわっ、きつたね！」

ヘドロ人形を二、三体切ったところでエルが言った。

「剣がベトベト……」

舌をベツと出しながらつぶやく。

「そりゃヘドロだしな」

ラーバルは自分の槍を見て、エルと同じような顔をしながら言った。ジューンはそんな様子を見てため息をついた。

「おぬしら、何を間の抜けたことを言っておるのじゃ」

ジューンがそう言うと、エルはジューンを睨んだ。

「なんか、何言ったかわかんないけど、馬鹿にされた気分……」

そんなやりとり等を交わしながら先に進む四人。

「……どうやら、こころしい」

ラーバルがつぶやいた。三人も顔つきが変わる。

「なんだか、嫌な気分」

ティナも不安そうに言う。

「気を付けよ、ただならぬ気配を感じる」

ジューンは隙なく気を張っている。

「んじゃ、行こうぜ」

エルが言った。いつもどおりの言葉だが、緊張が混じっている。

重苦しい雰囲気扉を開き、中へと入っていく四人。

中は、広い円型の部屋だった。壁にはいくつもの穴があり、あちこちに続いているのがよくわかる。壁ぎわには、よくわからない物体が多数あった。

「不気味な部屋。嫌な気分……」

ティナがエルの服を掴みながらつぶやいた。ラーバルとジュンは隙なく構えている。

「？ 何か音がしねえか？」

ラーバルの一言に反応し、三人は耳を澄ませて辺りを警戒した。すると、不気味な音が聞こえてきた。たとえるなら、ヘッド人形が歩いているときと同じ音が。

「！ 来るぞ！」

ジュンが言い終わったすぐ後に、上から何かが降ってきた。それは床にグシャツと着地すると、みるみるうちに形を作っていた。

「魔物か！」

それは徐々に形を生成し、目と口ができあがった。そしてエル達を睨み付け、気味の悪い大声で吠えた。

第三章 四部

「気味が悪い……こいつはジャンクゾンビとかいう中級魔物だぜ」
ラーバルは『ジャンクゾンビ』を見つめながらつぶやいた。エルは剣を握る力を強め、ニヤリと口の端を上げる。

「うりゃー！」

やはり真っ先に突っ込んでいった。ラーバルも接近する。

「馬鹿者！ 無闇に突っ込むでない！」

ジユンは注意深く接近していく。

「ジャベリンフォール！」

ティナは詠術を放った。上から降ってきた槍は、ジャンクゾンビにすべて直撃した。

「円周斬！」

エルもジャンクゾンビに切り掛かる。

「弧破双槍！」

ラーバルも切り払うが、ダメージを与えてるようには見えなかった。

「やべえぞこいつ、斬撃が効かねえ！」

ラーバルは後ろに下がりつつ、ジャンクゾンビのヘッド口攻撃を避けながら言った。

「じゃあどうすんだよ！」

エルは飛来するヘッド口を防ぎながら聞いた。

「まずはやつの周りを包んでいるあの泥を払うのじゃ！ そうすれば本体が表れる！」

悩むラーバルの代わりに答えるジユン。

「わかった！ 行つくぞー！ 瞬突撃！」

エルは二段突きを決めた後、態勢を低く取った。
シップウエンザンケン
「疾風燕斬剣！」

エルは飛び上がりながら切り付け、さらに空中で回転し切り付け

た。エル自身は切り付けた衝撃で後ろに飛んだ。

ジャンクゾンビのヘドロが大量に吹き飛んだ。

「炎よ、灼熱の渦となり、焼き尽くせ！ バーストーム！」

ティナの詠術により、さらにヘドロが飛ぶ。ジャンクゾンビは焦り、攻撃を激しくした。

「うわつと！ こいつ、焦ってやがるな」

ラーバルがつぶやいていると、脇をジュンが駆け抜けた。

「真裂颯！」
シンレツソウ

ジュンはそう言い放つと、一瞬だけ剣を振った。あまりにも速かったため、周りにはジュンが腕を軽く動かしただけにしか見えなかった。だが三筋の斬痕がジャンクゾンビについていた。

「速！」

エルとラーバルが同時に叫んだ。その間にジュンは腰を下ろし、構える。

「刹那純斬牙！」
セツナジュンザンガ

また再び腕を軽く動かしただけに見えた。今度は五筋の斬痕が残った。残りのヘドロがすべて吹き飛んだ。ジャンクゾンビは怒り、わずかに隙ができたジュンを殴り飛ばした。

「くあつ！」

「ジュン！」

ジュンは後ろに吹き飛び、ラーバルがキャッチする。

「ジュン！ このやるー！」

エルは一直線にジャンクゾンビの本体目がけて走った。ジャンクゾンビは接近させまいとゴミを飛ばす。

ヘドロが落ちたジャンクゾンビは、街から出たゴミが集まったような姿だった。

エルは右に左に避けながら接近し、ジャンクゾンビが飛ばした木箱を上に乗ってかわす。

「食らえ！ 縦振斬！ 流水葉浪翔！」

飛び縦切りから十字四回切りに繋がった。

「これで終わったと思うなよ！」

エルは下段に構えた剣を思い切り切り上げ、次には切り下げた。

「秘奥義、樹葉突風閃！」
ジュハットブウセン

最後に回転切りを放つ。その回転で生じた突風が風の刃となり、ジャンクゾンビに追い打ちをかける。

「ヴオオオオ！」

ジャンクゾンビの体が徐々に崩れはじめ、やがてゴミの山と化した。

「……よっしゃ、勝ったー！」

エルは喜び、握りこぶしを上挙げた。

「ジュン、大丈夫か!?」

ラーバルはジュンを揺すった。ジュンは氣を取り戻し、ゆっくりと目を開く。

「このくらい、平気じゃ……」

ジュンは意識を完全に回復すると、立ち上がった。ラーバルとティナはほっとため息を吐く。

「そうだ、ジュン大丈夫!?」

勝利の余韻から目覚めたエルはジュンのもとへと駆け寄った。ラーバルとティナは心の中でつぶやいた。氣付くのが遅い、と。

「平気じゃ。それより、早くここから出よう。用は済んだのじゃから」

ジュンの提案に三人も賛成する。

「しかし、なんであんなもんが街の地下に？」

ラーバルが言った。噴水の近くで四人は向き合っている。

「わからぬが、何か陰謀を感じる」

ジュンは顎に手を当てて考えている。

「でも、街にあまり被害がなくてよかった」

ティナは笑いながら言った。エルとラーバルがうなずいた。

「それより、今日はもう疲れたよ。早く宿に行って休みたいー」

エルがそう言った。ラーバルは、まったくこいつはと小さくつぶやき、宿に迎うエルに続く。

「あやつは、いつもああなのか？」

ジュンがティナに尋ねた。

「はい、そうです」

ティナがそう答えると、ジュンは呆れた様子でため息を吐く。

「行きましょう」

ティナはそう言うと言歩き始めた。ジュンも続く。

「つーかれーたー！」

エルが宿に向かって走りながら言った。

「ちょっと待て！ 矛盾してるぞおい！」

ラーバルはツツコミを入れつつ追う。

「着いたー！」

エルは宿の前に立ち叫んだ。

「ご苦労さま」

突然後ろから声がした。エルが振り返ると、白いローブが目についた。ラーバルも追い付き、白いローブの男を指差した。

「てめえは！」

二人が声をそろえて叫んだ。

第三章 五部

「私のことを覚えてましたか」

ローブの男は楽しそうに軽く笑った。

「でも、まさかジャンクゾンビが、未完成とはいえやられるとは……」

ローブの男はうれしそうに笑う。エルとラーバルは身構えた。

「おまえがモトリとかいうやつか」

ラーバルが指を差して言うと、ローブの男は少し驚いた。

「私の名前をご存じとは……誰から聞いたのかはともかく、ええ、私はモトリと申します」

ローブの男モトリは優雅に頭を下げる。

「さっそくで悪いのですが、死んでいただきたい」

モトリは笑顔で言った。エルとラーバルは武器を手にとって構える。

「私には勝てませんよ。マグネット・フィールド」

いつかのように、磁力の空間がエル達を包んだ。

「うわっ！」

二人は磁力の空間の中で身動きが取れなくなり、ただモトリを睨み付けるだけだった。

「ちきしょおお！」

エルが叫んだ。モトリはフツと鼻で軽く笑うと、左手をエル達に向けた。

「フレイムアロー！」

詠唱をしたのはモトリではなかった。急な攻撃に対してバック宙で回避するモトリ。その時、エル達を包んでいた磁力の空間が消えた。

「エル！ ラーバル！」

ティナが走って二人の元に駆け寄る。

「ティナ、ありがとう」

エルは立ち上がりながら言った。ラーバルもありがとうと言いな
がら立ち上がる。

「ほう、仲間ですか。また厄介な……」

ふとモトリはティナの走ってきたほうを向いた。その視線の先には、殺気をむき出しにしながらこちらに走ってくる少女がいた。

「四人、ですか……」

モトリはエル達四人を見て舌打ちした。

「どうだ、これでもやるか？」

ラーバルは少し余裕を持って言った。モトリはおもしろくなさそうにため息をついた。

「仕方ありませんね。こちらも増援といきましょう」

モトリは指をパチンとならした。すると、後ろの空間が歪み、詠
唱士が三人出てきた。

「これでいいでしょう」

モトリは笑った。だが目は笑ってはいなかった。

八人はそれぞれ構える。

「行くぜ！」

エルが張り詰めた空気を破って飛び出した。モトリに向かって一
直線に走る。

それを妨害しようとした詠唱士の一人に槍が突き出てきた。

「対の数なんだ。俺の相手をしてもらうぜ」

ラーバルは不敵に笑い、詠唱士は舌打ちしてラーバルから離れた。

「一対一でも一対二でもよいぞ。さあ、来るがよい！」

ジュンは刀の柄に手を掛け構える。それに対して詠唱士の一人が
詠術を唱える態勢に入った。

「私だって……勝てる！」

ティナと詠唱士はそれぞれ睨み合い、詠術の態勢を取る。

「せりやあ！」

ラーバルは槍を振り回し、詠唱士は紙一重でかわしていく。

「アーステイル！」

詠唱士が詠術を唱えた。すると地面から鞭のようなものが生えて、ラーバルに襲い掛かった。

「うわっち！」

ラーバルは槍でそれを防ぐ。直ぐ様詠唱士が同じ詠術を使用した。うわっ連続かよ！　っとと！」

槍で地面の鞭を捌きつつ、ラーバルは反撃の機会をうかがっていた。

「（よくよく考えたら、隙だらけじゃん、あいつ）」

詠術の連続使用により、完全に押していると思いついでいる詠唱士は、その場に棒立ちになっていた。

ラーバルはそれを逃さなかった。

「アホッ！　この程度！」

地面の鞭を一払いし、一気に詠唱士と距離を縮める。

「何！？」

「遅い！　突牙弾！」

詠唱士が気付いたときには、ラーバルの槍が体を貫いていた。

「この程度か」

ジュンは地面に倒れている詠唱士を見下しながらつぶやいた。

「まさか真裂颯の一撃で倒れるとはな。あつけないやつじゃ」

ジュンはティナのほうを見た。

「ジャベリンフォール！」

槍が空中から詠唱士目がけて降ってくるが、半分は回避し、もう半分はローブをひるがえして弾いた。

「（ラーバルの方もおわっておるようじゃから、ティナを）助けなければの」

ジュンはティナが相手にしている詠唱士に向かって走った。

「エアカッター」

「ファイア・ボール」

詠唱士が放った詠術と、ティナが放った詠術がぶつかり合い相殺した。

「アーステイル」

詠唱士はすぐに詠術を放った。ティナはまだ態勢が整っていなかった。

「っ！」

ティナは、自分に向けてしなってくる地面の鞭を確認し、尻餅をつき、恐怖で目を瞑った。

ザンツという、何かを切り裂く音が聞こえ、ティナは恐る恐る目を開く。

そこには、地面の鞭が四等分になって地面に転がっていた。視線を上にとげると、艶やかな黒色のポニーテールが自分の前にあった。「油断しおって、馬鹿者。早く立つのじゃ」

ジュンは相手を見据えながら言った。ティナは急いで立ち上がり、ジュンの隣にならんだ。

「すみません、ありがとうございます」

ティナがそう言つと、ジュンはクスリと笑った。

「エル達には普通に話すのに、我には敬語を使うのか」

ティナは一瞬驚き、次には小さく笑った。

「じゃあジュン、援護をお願い」

「承知！」

ティナとジュンは、目の前の相手に対し、隙なく構えた。

「ちょっと待って、自己紹介くらいさせてよね。ボクはその辺の雑魚ABとは違うんだから」

詠唱士が突然言った。二人は驚き、固まった。

「ボクはフィジー。今は見習いつてことになってるけど、いずれは国王直属の詠唱士になるんだ」

フィジーと名乗る詠唱士は笑顔で言った。

「なるほど。では先程相手にした者より、おぬしの方が強いというわけじゃな」

ジュンがそう聞くと、フィジーはうなずいた。

「あっちにはジュンがついたから大丈夫だろ。問題はエルか」

ラーバルがエルの方を向くと、エルは剣を構えて立っていた。

「どうしたのですか？ 仕掛けてこないのですか、猪のように」

モトリは挑発するように言った。だがエルは動かなかった。

「へん！ そんな挑発に誰がのるか！」

エルは笑顔で言った。モトリは少し白けたようにため息をついた。

「そうですか……」

モトリがそう言った後、ラーバルがエルの隣に並び、槍を構えた。

「さあて、リベンジマッチだ！」

第三章 五部（後書き）

モトリ 年齢28才 身長182cm シュトナの部下の詠
唱士。性格はシュトナ並に歪んでいる。話すときは敬語で話すが、
人をけなしているようにしか聞こえない。地属性の詠術を使用し、
多少なら格闘術も扱えて、頭も切れる。シュトナの右腕。

第三章 六部

モトリはその場から動かずに二人を見ている。エルとラーバルは武器を構えてモトリを見据えている。

「行くぞ！」

エルは飛び出した。すかさずモトリは左手をかざす。

「インタラプトウォール」

地面から複数の壁が出現し、エルの前進を妨害した。

「あいたつ！ 壁！？」

エルはぶつけた額を擦りながらつぶやいた。ラーバルはその壁を槍で付き崩した。

「ダメージを与えれば簡単に崩れるぞ！ エル、行くぞ！」

ラーバルはモトリに向かって走った。エルも遅れて走りだす。

「フツ、マグネット・フィールド」

モトリは詠術を唱え、磁力の空間を作った。エル達はその中に……。

「何！？」

いなかった。ラーバルは上に飛び、エルはバックステップで回避していた。

「タイミングさえ掴めばこっちのもんよ！」

ラーバルは上空から槍を縦に振り、モトリはさらに後ろに下がる。

「ば、馬鹿な……この短期間で成長したというのか！」

モトリは驚いていた。少し前までは子供のチャンバラでしかなかった剣技が、今では驚異と呼べるまでになっていたことに。そして、少年達の急成長に。

「仕方ありませんね。こちらも本気でいきましょう」

そう言つとモトリは格闘技の構えを取った。

「拳闘士！？」

ラーバルは驚いた。詠術を使うものは大抵、術を極めるために他

のものにまでは手は回らない。そう思っていたのだが、目の前の相手は拳を顔前に構えている。

「詠唱士だからといって、詠術しか使わないなどということはありませんよ」

モトリはそう言つと、軽く前後に飛び始めた。

「やつかいだな」

「うりやああ！」

ラーバルのつぶやきとエルの叫びは、ほぼ同時だった。エルはモトリに向かって剣を振りぬいた。しかしモトリは後ろに飛んでそれを避けた。

「エアインパクト！」

モトリは左手をエルに向け、詠術を放った。空気の塊がエルを襲う。

「ぐはっ！」

三、四メートルほど後ろに吹き飛ぶエル。それと入れ代わりにラーバルが突撃した。

「弧破双槍！」

槍を左右に払う。が、しかし、高い金属音が二度響いた。

「ガントレットか！」

ラーバルは舌打ちする。モトリの腕は、鉄製の小手によって肘まで守られていた。モトリは一瞬微笑み、ラーバルの腹部目がけて鋭いストレートを放つ。

「うぐっ！」

「まだですよ」

モトリは、仰け反るラーバルにアッパーで追い打ちを掛けた。
センコウクウセツゲキ

「閃光空切撃！」

さらにパンチの連打をたたき込む。ラーバルは両腕で体をかばったが、衝撃で後ろに吹き飛んだ。

「があっ………いってーなあ」

ふらふらとラーバルは立ち上がる。それを見てモトリは笑った。

「やはりこの程度でしたか」

モトリは余裕の笑みを浮かべながら、ラーバルに近づいていく。
ラーバルは必死に槍を構え、目に闘志を燃やした。

「瞬突撃！」

エルが二段突きを放ったが、モトリに片手で止められた。

「ファイア・ボール」

さらに攻撃を受けとめた手から詠術を放つ。

「うわぁ！」

防ぎきれなかったエルは直撃を受け、後ろに吹き飛び倒れた。

「エルッ！」

ラーバルは一瞬エルのほうを見て、再びモトリに視線を戻した。

「てめえ、よくもエルを！……許さねえ」

そうつぶやき槍を構え直す。それを見たモトリは警戒を強めた。

「突牙弾！」

鋭い突きを放つ。モトリは左にひらりと避けた。

「このっ！ 三重突牙弾！」

さらに三連続で突きを放ったが、すべて捌かれた。

「遅いんですよ」

モトリが馬鹿にするように言うと、ラーバルの視界から消えた。

次の瞬間、ラーバルは腹部に強い衝撃を受けた。

「響撃波！」
キョウゲキハ

ラーバルは直撃を受け、後ろに吹き飛んだ。なんとか体勢は建て直し、地面に転がらずにすんだ。

「があっ！ ゲホッ！」

苦しくなり、何度か咳き込むラーバル。モトリはさらに接近してきた。

「そろそろトドメといきましょう！」

モトリは拳を構え、ラーバルに向かって飛んだ。

「爆竜牙！」
バクリュウガ

「狼絶破！」
ロウゼツハ

モトリは、空気との摩擦により炎が発生した強力なストレートを。ラーバルは、グオウツと、狼が吠えたかのような風切り音が発生するほど強力な縦振りを、二人同時に放った。

壮絶な金属のぶつかり合う音の後、モトリが後ろに飛ばされた。

「くっ、馬鹿な!？」

モトリが体勢を整え、ラーバルのほうを向くと、ラーバルはすでに槍の間合いにモトリを捕らえていた。

「三重突牙弾!」

再び三連突きを放つ。モトリはすべて捌いた。

「当たりませんよ!」

モトリは、顔は余裕を保っているが、内心はかなり焦っていた。それを見抜いたラーバルが、槍を片手に持ちかえた。

「避けられるもんなら……避けてみな!」

ラーバルはそう叫び、槍を突き出した。モトリはそれを捌き、ラーバルの顔を見た。

「ただの突きではありません……か!？」

モトリが一瞬油断し、そこにすかさず槍が来た。槍は除々に突く速度を上げてきた。

「くっ! ぐあ!」

モトリも捌く速度を早めたが、次第に体に当たり始めた。

「秘奥義!」

ついには槍の残像が見える程まで加速していた。

「連魔殺突牙弾!」
レンマサツツガン

無数の槍の残像に、もはや守り一辺倒いっぺんどうとなったモトリ。急所のみをなんとか防ぐのみだった。

「風通し良くなったか?」

槍を肩に担ぎ、苦笑いで言うラーバル。視線の先には、満身創痍となりながらも、しっかりと立っているモトリがいる。

「フッ、フフ……」

守りの体勢を解き、モトリは微笑んだ。

「やるじゃ、ありませんか……ついこの間までは、かすらせるのが
やっとだったというのに……」

モトリは、うれしそうにも悲しそうにも、見方によってはどうでも
良さそうに笑った。

第三章 六部（後書き）

フィジー 年齢17才 身長194cm シュトナに才能を認められ、サトの代わりに配属された少年。9才の時に詠術を覚え、10才の時には上級詠術を使いこなしているほどの天才。目は、左目が茶色、右目が白のオッドアイである。

第三章 七部

「ふう……聞きたいことがある。どうして俺たちを狙いにきた」

ラーバルは槍をモトリに向けて、息を整えてから尋ねた。モトリは微笑んだまま、立ち尽くしている。

「……フィジー君、退却しますよ」

不意にモトリは左手を上空にかざし、後ろの空間に歪みが出来た。「え、これからがいいとこだったのに」

フィジーは口を尖らせて言った。モトリはやれやれと頭を振る。

「私がここでやられると、あなたは四人を相手にしなくてはいけなくなる。そうなればあなたに勝ち目はなくなります」

「僕が負けるわけないだろ」

モトリが冷静に言うのと、フィジーは明るく言い返した。

「あなたはこれからフェイスフルエッジとなるのでしょうか。こんなところでくすぶっていてももったいない」

モトリが半ば説得するように言うと、フィジーは不満げながらも同意した。

「ま、待て！ 質問に答えろ！」

歪みの中へ消えていくモトリに、ラーバルが叫んだ。するとモトリは僅かに振り返る。

「……邪魔だから、ですよ。あの男同様に」

そう言い放つと、モトリとフィジーは歪んだ空間ごと消えた。

「邪魔、ねえ……そうだエル、ジュン、ティナ！ 大丈夫か!？」

ラーバルは振り返り、エルを見た。エルはどうやら気を失っているようで、地面に倒れている。ホツと胸を撫で下ろし、視線をティナ達へと移した。

ティナ達は満身創痍で、ティナはジュンに担がれていた。

「ティナ！ ジュン！」

ラーバルは二人に駆け寄った。

「あ……」

ジュンは、自分に駆け寄ってくるラーバルの姿を確認すると、視界が真つ暗になった。ティナを担いだまま前に倒れこむ。

「あぶね！」

倒れるジュンとティナを、ラーバルは滑り込むように両腕に収めた。

「とりあえず宿に運ばなきゃな」

ラーバルはすぐ近くの宿に運び込んだ。

「し、シュトナ……これはいったい……」

王城、シュトナの部屋。ここで一人の詠唱士を取り囲むように、複数の詠唱士が立っている。

「フフツ……馬鹿だなあ君は。見たまんまじゃないか」

シュトナはいやらしい感じでそう言うと、腕を上挙げた。

「フェルト……君は少しやり過ぎたようだね。おかげでまた生け贄を集めなきゃいけなくなったじゃないか」

シュトナは言葉の内容とは裏腹に、うれしそうに笑っている。フェルトは隙なく構えた。

「本当はこんなことしたくないんだけどねえ……」

シュトナは腕を挙げたままそう言った。フェルトがシュトナを睨み付け、微笑む。

「どうせやりたくてしょうがないんだろ。それ位ボクにだってわかる」

その言葉を聞いた途端、シュトナは甲高く笑った。

「そうだよ。君を殺したくて殺したくてしょうがないのさ！ 正義の味方を気取りやがって、フェルトのくせに生意気なんだよ！」

シュトナは言うだけ言うと、指をならした。すると、フェルトを取り囲んでいた詠唱士が一斉に詠術を放った。

「くっ！」

フェルトは周囲に障壁を展開し、すべてを防いだ。障壁にあたった詠術は、その衝撃に加え、他の詠術と混ざり合い、爆発を起こした。

「……くっ……」

爆風で部屋の外まで吹き飛ばされたフェルトは直ぐ様起き上がり、あてもなく廊下を走った。

「フェルト……クク……ハーハツハツハ！」

シュトナは爆煙の中、無傷で立ち尽くし、笑った。

「はぁ、はぁ……」

なんとか城の中庭に出たフェルトは、膝に手を突いて呼吸をする。中庭に向かう途中、幾度となく詠唱士に狙われ、それらを撃退しながら来たため、体力的に限界が来ていた。

「シュトナ……グランダム様……」

フェルトは背筋を伸ばし、後ろに振り返った。フェルトが睨み付ける先には、シュトナとグランダムがいた。

「フェルトよ、なぜ生け贄の者達を逃がしたのだ」

グランダムがやさしい口調で尋ねる。フェルトは一瞬目を閉じ、開いた。その瞳は黒く輝いていた。

「生け贄なんて……間違っています！ 大体、あの儀式は本当にこの国のためになるのですか！？」

フェルトが怒鳴るように言った。今までにないくらいに強く。

「ああ」

グランダムは短く答えた。だがフェルトの表情は変わらなかった。「本当ですか……魔獣復活が本当にこの国のためになるのですか！？」

フェルトが『魔獣』という言葉を発した途端、グランダムとシュトナの表情が変わった。

「フェルト……おまえどこまで知ってたんだ？」

シュトナが真面目な表情で尋ねる。

「……世界に破滅と絶望をもたらす魔獣……『ゼロ』！」

フェルトは大声で言った。グランダムとシュトナは表情を曇らせた。

「やつぱり……おまえは生かしてはおけないな……フェルトオ！」

シュトナはそう叫ぶと、詠術を唱える体勢に入った。フェルトもそれに対抗して構える。

第四章 一部（前書き）

この章より、しばらくフェルト編

第四章 一部

「フェルト……君が俺に勝てると思ってるのか？」

シュトナは構えたまま言った。その顔には余裕の表情しかなかった。対するフェルトにはそれがなかった。第三者が見ても、その力量差は明らかだった。

「……フェルト様が負けるにや」

中庭にある大きな木の影で、一人の少女がつぶやいた。

「……そりやそうでしょ。シュトナ様の詠術の力は、フェイスフルエッジで一番最強なんだから」

少女の隣にいた女性が小さな声で言った。少女はそうだねと軽くうなずき、視線をフェルト達に戻す。

「フフフ……君は何発まで耐えられるかな？」

シュトナはそういうと、左腕をフェルトに向けて突き出した。

「っ！」

フェルトは障壁を展開し、防御の体勢に入った。

「ブレイクウインド！」

シュトナが詠術を放つ。放たれた詠術はフェルト目がけ、真つすぐに飛んだ。そして障壁に衝突して弾けた。

「うわっ！」

フェルトは衝撃波を受け、後ろに吹き飛び、そのまま気を失った。

「おやおや。手加減しても一撃とは……弱いなあ、フェルト」

嘲笑いながらそう言うと、シュトナはトドメを刺そうと左手をフェルトに向ける。

「グッバイ……フェルト……」

シュトナがそう言った瞬間、足元にナイフが突き刺さる。

「なんだ？」

シュトナは警戒して、一步後ろに下がる。するとナイフは、突然強力な光を発した。

「！？ 目眩ましか！」

シュトナとグラウンドは意表を突かれ、視界を奪われた。

シュトナがいち早く目を開くと、壁に打ち付けられ、気を失って倒れているはずのフェルトがいなかった。

「……まだいたんだ、裏切り者」

そうつぶやくと、シュトナは狂ったように笑った。

「ふう、なんとか成功したみたいね、空間移動」

フェルトを担いだまま、女性がつぶやいた。

「でも……ここ、どこ？」

少女が不思議そうに辺りを見回しながら言った。

この二人は、先程シュトナとフェルトが対峙していた時に、陰で見っていた二人だ。

「う……」

フェルトが意識を取り戻し、目を開く。

「あら、気が付いたみたいね」

女性はそう言つと、近くの木の本元にフェルトをおろした。

「くっ……ここは？」

体が痛むため、フェルトは首だけを回して辺りを見回す。大きな木々が立ち並び、辺りは薄暗く、わずかに差し込む光が地面に刺さっているのが確認できた。

「さあ？ 適当に跳んできたので、現在地がどこかは……」

その声を聞いて、フェルトは初めて女性の存在に気付いた。

「君は？」

「私はミスティです」

フェルトが尋ねると、女性は微笑みながら答えた。フェルトも微笑み返すと、突然少女が間に割り込んできた。

「ミスティだけずるーい！ フェルト様、私ね、私ね、セレナって

いうの！」

セレナという少女が元気よく自己紹介した。フェルトが苦笑いして、そうかと返すと、少女はうれしそうに抱きつく。

「うわーい！ 本物のフェルト様だ〜！」

セレナがともうれしそうに抱きついていて、多少困惑するフェルト。

「あ……えーと、少し離れてもらえないかな？」

フェルトがセレナにそう言うと、セレナは悲しみを湛えた表情でフェルトを見上げた。

「えと……フェルト様、私のこと、嫌い？」

「いや、嫌いとか……そういうわけじゃ」

「わーい、よかったー！」

おどおど話すフェルトの言葉を、さえぎるかのように再び抱きつくセレナ。そんなセレナの頭を見つめて、泣きたい気持ちを押しさえるフェルト。無邪気ゆえに、怒るに怒れないのだった。

完全な困り顔で、ミスティに助けを求める。ミスティは軽くため息をついた。

「ほら離れなさい。フェルト様が困ってるでしょ」

そういうと、ミスティはセレナを抱き上げる。

「うわーん！ もっとフェルト様に『ぎゅー』したいのに！」

セレナはミスティに抱き上げられ、脱出しようと暴れた。その間にフェルトは立ち上がる。

「それにしても、なんでボクを助けたんだい？ そんなことをしたって、君たちには何の得もないだろう」

フェルトは、服に着いたほこりを払いながら尋ねた。ミスティは地面にセレナを置くと、懐から一枚の紙を取り出した。

「これを」

その一言を言い、紙をフェルトに差し出した。フェルトは紙を受け取り、目を通す。

「……そう、か」

読み終えたフェルトは、その紙を自分のポケットにしまい込んだ。

「これは一応ボクが預かる。問題は？」

「いえ」

ミステイが短く答えると、フェルトはうなずいた。

「それじゃあ、まずはここを出よう。たぶん王城からそんなに離れていないから、おそらく『クレスの森』だろう」

そういうとフェルトは、ポケットから懐中時計を取り出し、時間を確認する。そして、わずかに差し込んでいる日差しを見た。

「とりあえず、東に向かおう。『クック港』があるはずだ」

フェルトの言葉に二人は同意した。今の時間と、日の差し込む向きから、方角を割り出したフェルトは、東に向かって歩き始め、その後ろに二人が続く。

第四章 一部（後書き）

ミステイ・サンロード 年齢24才 身長177cm 普段は冷静に保っているが、実は非常に感情的な性格。細かいところまで指摘しなければ気が済まないような几帳面で、時折けむたがれることもある。セレナとの関係は「昔からの腐れ縁」だとか。

第四章 二部

「ふきゅー……疲れたー」

セレナはそう言っていると、近くの大きめの石に座った。

「こらセレナ、立ちなさい！」

ミステイが後ろを振り返り、セレナに言った。しかし、セレナはぷいっと顔を背ける。

「疲れたもーん！ もう歩けないー！」

セレナは口を尖らせ、ミステイは眉をひそめる。

「フェルト様、なんとか言ってください」

ミステイはフェルトの方を向き、言葉待った。

「……休憩しよう」

ミステイは、期待していた言葉とは違う返事が返ってきたので、頭を抱えた。

「フェルト様！ 甘やかさないでください！」

ミステイはフェルトに抗議するが、フェルトはかまわずに座り込む。

「甘やかしてるわけじゃないよ。ただ、ボクらの歩いた距離と戦闘回数から考えて、この辺で一度休んでおいたほうがいいからね」

そう言っているとフェルトは、深く目を閉じた。ミステイは軽く呆れながらも、仕方なく腰を下ろす。

「……？」

不意にフェルトは頭を上げた。ミステイがその様子に気付き、フェルトに近づく。

「どうしました、フェルト様？」

ミステイが問い掛けたが、まるで聞こえていないかのように、フェルトは耳を澄ませた。

「……何かが、来る」

フェルトはそう小さくつぶやいた。ミステイは一瞬驚き、フェル

トと同じように耳を澄ませた。

「……足音？」

二人の耳に届いた足音は、森林の中から徐々に近づいてくる。

「何か来る！」

フェルト達は警戒して構える。その足音は、段々と大きさを増していく。そして、フェルト達を通ってきた道から大きな白い鳥が、甲高い鳴き声とともに現れた。

「こいつは、『コカトリス』！？」

フェルトは驚き、なぜコカトリスがここにいるのかを考える。

「トサカが赤い……怒りの証だ。コカトリスは温和な魔物のはず。それがなぜ……」

フェルトがぶつぶつとつぶやいていると、コカトリスは容赦無く、巨大なくちばしをフェルト目がけて振り下ろした。障壁を展開してそれを防ぐ。

「対象はボクか！ まさか、誤ってこいつの縄張りに入り込んでいたのか！？」

フェルトは再び構え、ミステイとセレナはフェルトの後ろに付いた。

「倒すしかない、か」

コカトリスのおたけびを合図に、ミステイが思い切り飛び出した。
「鋼直羽！」
コウジキバ

ミステイの細くしなやかな腕が、なんのブレもなく、真つすぐコカトリスに伸びる。丈夫な革でできたグローブに包まれた拳が、コカトリスにめり込む。

「クカアアア！」

コカトリスは、鼓膜に突き刺さるような泣き声を上げ、くちばしを振り下ろす。ミステイは間一髪で、それを後ろに避ける。

「気を付ける！ コカトリスのくちばしには、突いた相手を石化させる効果がある！」

フェルトは詠唱陣を展開しながら叫んだ。そうしている間に、詠

唱陣が完成する。

ゼロシキハカイテツキユウ
「零式破壊鉄球！」

フェルトがそう叫ぶと、詠唱陣が地面から浮き上がる。そして、フェルトの前に壁のように立ち上がると、中心から三十センチ大の鉄球を飛ばした。コカトリスは、飛来した鉄球の直撃を受け、怯む。

「もらった！ ガシユウテンジンハ 我蹴天神破！」

怯むコカトリスの顎に狙いを定め、ミスティは強力な垂直蹴りを放った。ミスティの足は見事に顎を捕らえ、コカトリスの巨体を軽く浮かせる。

「どんなもんよ！」

ミスティはガッツポーズを決め、よろこんだ。

「まだだ、油断しないで」

フェルトは冷静に相手を見る。コカトリスはふらふらと立ち上がる。

「でも、あんなにフラフラなんですよ？ もう楽勝ですよ」

ミスティはフェルトの方を向き笑いながら言った。その時、コカトリスはくちばしを素早く上にあげた。

「危ない！」

「え？」

フェルトが叫び、ミスティは急いで振り返ったが、遅かった。振り下ろされたくちばしをミスティは両腕で防ぐ。

「この程度……！？」

ミスティは自分の両腕を見て絶句した。くちばしを受けとめた部分から、徐々に石に変わっていく腕。

「いったん下がるんだ！」

フェルトは詠唱陣から石つぶてを飛ばし、コカトリスを怯ませる。その隙にミスティは後ろに下がった。

「腕が……」

ミスティはショックが大きく、頭が真っ白になっていた。徐々に進行していく石化。今は肘から上が完全に石になってしまっている。

ミスティが呆然と自分の腕を見ている間、フェルトとセレナは必死に戦っている。

「セレナ、回復系の詠術は使えるかい？」

フェルトはコカトリスと距離を取りながら、セレナに尋ねた。

「うん！ 使えるよフェルト様！」

セレナは、とてもうれしそうに頷きながら言った。

「じゃあ、すぐにミスティの腕を治してやってくれ！」

フェルトはそう言いながら、隙なくコカトリスに攻撃を繰り返す。コカトリスの元々の狙いはフェルトのため、すぐにミスティやセレナから顔を反らした。

「もう、ミスティ！ フェルト様に迷惑かけちゃダメでしょ！」

セレナは詠術を使用しながら、口を尖らせる。だが、ミスティには、その相手をするほど、心に余裕がなかった。

「……」

ミスティはただ啞然と、治りゆく自分の腕を見つめるだけ。

「零式破壊鉄球！」

フェルトは、自分の攻撃の連続性のなさに焦りを感じた。威力はあるのだが、出るのが遅い。当たればいいが、外れれば隙が大きい。フェルトは、自分の弱さを改めて悔やんだ。その時。

「！ しまつ……！」

一瞬の心の迷いで、狙いが狂う。元より直線的な動きの鉄球、コカトリスも多少見切れるようになってきていた。鉄球は、コカトリスの横の空間を通り抜けた。

「クアアアア！」

コカトリスは一気に間合いを詰め、くちばしを振り上げた。フェルトは目を見開き、見上げる。

「飛廉隆起山！」
ヒレンリョウキサン

突如、フェルトの視界外からミスティが飛び込んだ。地に伏せた

状態から、コカトリスに対して連続蹴りを放つ。コカトリスの巨体は、強力な蹴りに耐えられず、軽く宙に浮く。その間にミステイは立ち上がる。

「なめんじゃないわよ！ 秘奥義！ コンティニユアスブロー！」
体勢を立て直したコカトリスに対し、雨が横から吹き付けるような拳の乱撃。ミステイの怒りに燃える顔ですら、霞んで見える高速体術。時折聞こえる、骨の折れる音。それが止んだとき、コカトリスは地に墜ちた。

「あたしをなめるからだ！」

ビシッと人差し指をコカトリスに向け、吠えるミステイ。この時、フェルトは思った。彼女を怒らせないほうがいい、と。

第四章 二部（後書き）

セレナ「マステイカ」 年齢14才 身長135cm 孤児院
に預けられていたところを、王城のある地方「バーレーン」の中
も、上流の貴族「マステイカ」家に養子として引き取られた娘。旧
姓はない。詠術の英才教育を進んで受け、最年少での「貴族軍」所
属となった少女。ミステイとの出会いもその時。

第四章 三部

「……すまない」

フェルトはコカトリスの亡骸に手を当て、黙禱もくとうを捧げた。ミステイとセレナは、なぜそうするのか理解できなかった。

「君は、自分の領地を荒らされて腹を立てただけだ、何も悪くはない。生きものとして当然のことだから」

フェルトは立ち上がり、後ろで見守っていた二人に振り返る。

「行こう。クック港はあと少しだ」

フェルトの言葉に、二人は頷いた。

「わあ！ 海の匂いがするー！」

深い森林に、前方から光が射した。セレナはその光の方向に向かって走りだす。

「こらセレナ！ 勝手に行かないの！」

ミステイが注意するも、セレナは効く耳もたず。かまう事無く森の出口へ直進した。セレナはいち早く森を抜け、フェルトとミステイが後に続く。

「うわー、海だー！」

セレナは両手を広げ、叫んだ。森を出てすぐの所から砂浜になっており、森との境目から五メートルほどの場所は波打ち際となっていた。セレナは波打ち際まで足を運び、しゃがみこむ。

「てい！」

セレナは思い切り水面を叩いた。水があちこちに飛び跳ね、セレナにもかかる。

「きゃは！」

その冷たさと、初めて近づいた海に興奮を覚えたセレナは、何度も水面を叩く。その姿は、水遊びをする少女そのものだった。

「そういえば、海にくるのは初めてだったわね」

いつのまにか後ろにいたミステイがつぶやいた。セレナは振り返る。

「そっだよ」

とてもうれしそうに言うセレナ。その後すぐに水遊びに戻った。その様子を、微笑みながら見つめるミステイ。そうしている間にフェルトが来た。

「海か。久しぶりだな。あの日、以来か……」

海を見つめるフェルトの目には、哀愁の色が映っていた。そして、ミステイやセレナに、その様子に気付かれる前に辺りを見回した。

「あつた。あれが『クック港』だ」

フェルトがそう言うのと、ミステイとセレナは、彼の指差した方角を見た。その視線の先には、小さいながらも立派な港があつた。距離は少し離れている。

「さあ、行くわよセレナ」

ミステイがそう言うのと、セレナは渋々と立ち上がり、フェルトの隣に並んだ。三人はクック港を目指して歩きだす。

王城。

「なかなか現れないね、適合者」

シュトナは退屈そうにつぶやく。その隣には、モトリとフィジーがいる。その二人は優雅に紅茶を口にする。

「シュトナ様、裏切り者のフェルトはどうしますか」

モトリはカップを皿に置き、手を太股の上で組んだ。シュトナはしばらく視線を天井に向ける。

「……俺は面倒臭いのが嫌いなんだ。わかるかい？」

ふとシュトナは懷から本を取り出し、しおりを挟んであるページ

を開き、読み始めた。モトリは軽く口の端を持ち上げる。

「わかっていますよ。刺客の用意はできております」

相変わらず人を見下すかのように言うと、立ち上がるモトリ。フイジーもそれに続く。

「俺は、君の事が嫌いだ、モトリ。そのしゃべり方がムカつく」

本から目を話さずにシュトナは言った。モトリは振り返らず、シュトナに見えないように嫌味な笑顔を作る。

「こういうふうに出てられましたからね。今更直しようがありませんよ」

そう言い残し、部屋を後にする。部屋に残されたのは、本を読み耽るシュトナだけだった。

フェルト達は、困惑の表情を浮かべて立ち尽くしている。

「……ですから、我々はもう軍とは関係ないんです！」

ミスティは先程から、延々と同じことを言っているのだが、相手はダメだの一点張り。

「あんたらどう見ても軍人だろうが！ 軍人はろくな奴らじゃねえ！ 帰れ！」

ミスティと言い合いをしているのは、クック港の建設者ロバート「クックの息子、ミハイル」クックである。

「とにかく帰れ！ うちには、てめえら軍人が踏める敷地なんか小指の爪ほどもねえんだよ！」

ミハイルはそう言ってミスティを突き飛ばした。

「きゃあ！」

後ろに飛ばされたミスティはそのまま地面に倒れた。セレナが急いで傷の応急措置を始める。ミハイルは、港に入るための唯一の入り口を、鉄製の柵で閉じ始めた。

「まってくれ！ 話だけでもいい、聞いてくれ！」

フェルトは一生懸命に言うが、ミハイルは冷たく無視して柵を張った。フェルトはがつくりと肩を下げる。

「……確かに、今の軍は最低だ」

フェルトは、まだ柵の向こうにミハイルがいることを信じ、口を開いた。

「なんの罪もない人を、なんの前触れもなく捕まえていつてる。しかも、それはボクのせいだ。ボクがああ石碑の言葉を解読しなければ、こうにはならなかった……」

ミステイも、セレナも、静かに聞き入る。

「……だからボクは、自分の手で、彼らを止めたい。それがボクに出来る、償いだから……」

しばらく沈黙が流れ、柵の向こうからはなんの反応もなかった。応急処置が完了したミステイは、ゆつくりと立ち上がった。

「……行こう。少し遠いかもしれないけど、レレソー山脈を横断したら、シエスター地方に出られる。そこにも港があったはずだ」

フェルトの表情は見えない。ふらりと歩きだしたフェルトに、ミステイとセレナが続こうとすると……。

「待ちな」

後ろから、申し訳なさそうな声が聞こえてきた。フェルト達が振り返ると、柵がわずかに開いており、その隙間からミハイルの顔が見えた。

「“止めたい”じゃなくて“止める”って言うんなら、船を一隻出してやるよ」

視線を足元に向けながらミハイルは言った。

「……ああ、そうだね。止めるんだ、絶対に！」

フェルトは喜びに満ちた表情で言った。この時、初めてミハイルはフェルトと目を合わせた。

「あんたら、他の軍人達と違って、いい奴らだな。俺はミハイル。ミハイル」クックだ。あんたとなら、仲良くなれそうだ」

ミハイルはフェルトに近寄り、握手のために手を差し出す。

「ボクはフェルト。フェルト」ニコラス。よろしく、ミハイル」
フェルトはミハイルの手をしっかりと握り、ミハイルも握り返した。

第四章 三部（後書き）

ミハイル「クツク 年齢19才 身長202cm クツク港
の開港者、ロバート「クツクの息子。熱血漢で、曲がったことは超
が付くほど嫌い。反対に、真つすぐなことは超が付くほど好き。身
長も高く力が強い。ため、時々船を海獣から守る仕事をする。人の恋
路には敏感だが、自分に寄せられる好意には鈍い。ちなみに、脳み
そまで筋肉で出来ているのではないかと思われるほどの馬鹿。

第五章 一部

ある小さな港から、小さな船が出た。小さいといっても、しっかりとエンジンが付いている。船は煙を吹き出しながら水の上を走る。ゆつくりと。

「あんたらの目的地の『リース』までは、三日くらいだな。まあ、のんびり行こうぜ」

ミハイルは二カツと豪快に笑った。ミスティはイラつき、フェルトとセレナはくつろいでいる。

「早くあの方と接触しなきゃいけないのに、三日も海の上だなんて……」

ミスティは船の中を行ったり来たりと落ち着かない。彼女が右往左往するたびに、セレナは目で追っている。

「焦っても始まらないよ、ミスティ。今は流れに身を任せるしかない」

フェルトはそう言うのと、少し広い船の縁に寝転がる。それを見たセレナは、真似をして寝転がる。ミスティはそれを見てさらにイラつき、足を船の床に打ち鳴らす。

「どうしてそうのんびりしてられるんですか！ 奴らがいつ動きだすかわからないのに！」

少々怒鳴り気味に言ったが、フェルトは聞き流していた。ミスティはその様子を察し、何を言っても無駄か、と悟った。船はゆつくりと波の上を進む。

王城。

「モトリ様。やつらを見失いました」

広い窓の窓際に立つモトリ。その目は窓の外、遠くに見える巨大な二つの塔を映している。報告にきた兵士は膝を付きながら、モトリの言葉を待つ。

「……まあ、放っておきましょう。今は泳がせたほうがいい」

モトリは嫌味っぽくそう言うと、兵士に振り返る。

「それより、今は適合者探しを優先しなさい」

モトリが言うと、兵士は軽く頭を下げ、部屋から出ていった。その足音を聞きながら、モトリは空虚に視線を向ける。

「フィジー君、君にも任務がありますよ」

空に向けて言葉を放つ。しばらくすると、モトリのしている先の空間が歪み、フィジーが出てきた。

「待ってました」。あの調子に乗ってるガキ共四人を邪魔すればいいんだね？」

フィジーがそう尋ねると、モトリは静かにうなずく。

「殺しちゃっても、いいよね」

そう言い放つと、フィジーは空間の歪みに消えていった。

フェルト達が船に乗ってから三日。右手に見える大陸を眺めるミスティとセレナ。彼女らの目的地である『リース』は、元いた『バーレーン』と陸続きだった。だから、右手にはいつも大陸が見えていたのだ。

「……フェルトさま………退屈」

セレナは焦点の定まらない視線を大陸に向けながら、ぼそりとつぶやいた。ミスティはセレナと一緒に、床にペタンと座り込み、船縁に手を置いている。

「あと一日か……子供にはつらいか……」

フェルトは釣りをしながらつぶやく。そう言うフェルトも、そろそろ限界に近づいていた。さすがに二日も船の上にいれば、疲れも

出てくる。だがそんな中、ミハイルだけは違った。

「なんだおまえら、このくらいでへバツてんのか？」

出発したときと変わらない笑顔で言い放つ。ミハイルは元々船乗りなので、二日や三日ではへばることはない。

「そりゃ、あんたがタフ過ぎんのよ」

ミステイはため息を吐きつつ言うつと、ミハイルは笑った。

「ちげえねえ！　なんたつて俺は船乗りの息子だしな……！」

ミハイルの顔が、急に真剣になった。そして急いで船を止め、手短にあつた銚子を手取る。

「どうしたんだい？」

フェルトは釣り竿を引き上げながら尋ねた。だがその表情に、先程までの気の抜けた雰囲気はなかった。ミハイルの様子を察し、ただ事ではないと理解しているからだ。

「……何かが来る。デカイぞ！」

ミハイルは、船乗りの勘で察知していた。海の中から迫り来る脅威を。ミハイルが船の下を覗き込むと、黒い影がユラリと揺れ、船を囲むように泳いでいた。

「こいつはデカイ……こんな船じゃ、一撃で沈んじゃうな」

ミハイルは冷や汗を流し、三人を見た。

「どうする？　このまま船にいても沈められる。海に飛び込んだら込んだで下のやつのお餌になる」

あまりにも狭い選択幅に、ミステイとセレナは顔を強ばらせる。

ミハイルはふとフェルトのほうに視線を向けると、何かを計算しているかのように、手のひらに人差し指で何かを描き、口は休みなく動き続けている。それが止まると、フェルトは顔を上げた。

「……ミハイル、選択肢を一つ増やすよ。七分。七分で勝負を決めるんだ」

フェルト以外の三人は、何を言っているのかわからなかった。だが、水中の影は確実に迫っている。

「とにかく跳ぶんだ！　こつち！」

おもむろにフェルトは船縁に手を掛け、乗り越え、海に着地した。残された三人はその様子に驚いた。

「さあ、大丈夫だから」

フェルトは軽く微笑んだ。その微笑みに後を押され、三人は跳んだ。その後すぐに船は真つ二つになり、海の藻屑となっていた。当の三人は、海の上に立っていた。

「防護陣を水面に張ったんだ。だけど、七分しかもたないから、早くあの怪物を倒さなきゃ」

フェルトはそう言い、ある一点を見つめた。残りの三人も同じ方向へ視線を向ける。そこには、大きなヘビのような生き物があり、鋭い目で四人を見つめている。

第五章 二部

「こいつは『シュケ』だ！ やっかいなやつにあたったぜ、ほんと」
ミハイルはそう言い、ため息を吐いた。そして、銛を構える。その姿は、大きな獲物を狙うかの如く、鋭く、そして隙なく構え、漁師そのものだった。

「キュアアアア！」

シュケは一声甲高く鳴くと、フェルト達目がけ襲い掛かった。四人はそれぞれステップを繰り返して、シュケの攻撃を避けた。噛み付き攻撃を外したシュケは、水面に張られた詠唱陣をすり抜け、水中に沈む。

「あんなのに乗られたら、さすがに保たないな……」

フェルトは苦笑いを浮かべながら、詠唱態勢に入った。

「貫け雷槍。ライトニングスピア！」

フェルトの放った詠術は、海中から頭を出したシュケに直撃した。シュケは軽く怯み、フェルトを睨み付ける。

「よそ見してつと、死ぬぜ！ 襲^{シュウガ}牙！」

いつのまにかシュケの顎の下に潜り込んでいたミハイルは、シュケの胴体に向かって銛を振り下ろす。銛がシュケに食い込み、肉を割く、まではいかなかった。堅い鱗に弾かれた。

「ぐあつ！ かってえ……」

ジンジンと痛む手を庇いながら、ミハイルは後ろに飛んでシュケの体当たりをかわす。その間にもセレナは詠術を放つ。

「シャドウスパイク！」

セレナの放った詠術がシュケに直撃すると、シュケは海中に再び潜った。

「どうやら、物理的ダメージには強いが、詠術による攻撃には弱いみたいだ」

フェルトは足元を警戒しながらつぶやいた。ミハイルはそれを聞

いて、手をさすりながらブツブツと文句を口ずさむ。シユケは海中でクルクルと旋回し、フェルトの足元から飛び出した。フェルトは障壁を展開し、その攻撃を防ぐ。

「ボクとセレナは詠術で攻撃する。ミステイとミハイルは腹部に攻撃をたたき込んで！」

フェルトは詠唱陣から石つぶてを飛ばしつつ、シユケと距離をとる。ミステイとミハイルは同時に駆け出し、一気にシユケとの距離を詰める。

「鋼直羽！」

エンロウコウ
「煙狼功！」

ミステイの正拳突きが決まり、それにつづいてミハイルの、鉈を支えにしての二段蹴りも決まる。シユケは僅かながらに怯み、狙いをフェルト達から二人へと変えた。それを見たフェルトは軽く微笑む。

「時間がないから、悪いけどこれで決めさせてもらうよ」

そうつぶやき、詠唱の態勢に入る。その目からは輝きが失せていた。セレナはその様子を見て、悟った。

「お、大きいのが出る……」

セレナは自然とフェルトから距離を取り、シユケから守るかのような位置に移動した。そして、フェルトの詠唱が始まった。

「我が手に携えし古の戦槍」

シユケはフェルトの様子に気づき、詠唱の妨害を行おうとしたが……。

「させないわ！ 我蹴天神破！」

ミステイはシユケの顎を狙い、蹴り上げる。強力な蹴り上げを食らったシユケは、一瞬動きを止めた。

「それでも食らいなさい！」

すかさずミステイは回し蹴りを放ち、続いて三連続蹴りをたたき込む。そして、逆回転の回し蹴りを放ち、今度は四連続蹴りを食らわせた。

「秘奥義、クラッシュハンマー！」

止めと言わんばかりに、腹部に踵落としをたたき込む。相当な衝撃がシュケを襲い、思わず叫びをあげた。

「その身は何者も触れることのできない豪雷の束」

フェルトの周りに、力の具現化現象が発生してきた。それは、フェルトの力が解放されつつあることを意味している。紫色の陽炎かげろうがフェルトを包む。

「シャアアア！」

シュケは一声甲高く叫び、口を閉じた。ミハイルはその瞬間で、次のシュケの行動を見抜く。

「野郎、水プレスか！」

言つのと同時にフェルトの前に立ち、防御の態勢を取る。その瞬間、シュケの口から、大量の水を収束した水プレスが放たれた。ミハイルはそれを銚と体で受け止める。

「うおおおおお！」

壮絶なおたけびをあげ、吹き飛ばされまいと踏張るミハイル。その様子を、ほんのメートルほどで見せられても、フェルトは眉一つ動かさなかった。

「貫かれし後、灰燼のみ舞う」

最後の言葉を言い終えると、フェルトを包んでいた陽炎が強く広がった。その様子に恐怖したシュケは、急いで海中に潜ろうとした、が……。

「ラージストライティング！」

闇夜より黒く、大木よりも太い稲妻が、一直線にシュケへ伸びる。シュケに直撃したその様子は、貫くよりも、喰らう、という表現のほうが相応しい。稲妻はシュケを内部に取り込むと、自然と消えた。後には、黒煙を上げ、海上に浮かぶシュケがいるだけだった。

「す、すげえ……」

ミハイルはボロボロな姿でつぶやく。セレナとミスティも驚愕の表情で見つめる。

「勝ったんだ、私たち」

ミスティはそう言っていると、ペタンと腰を落とした。

「ごめん、時間だ」

フェルトが唐突につぶやくと、足元の詠唱陣が消えた。四人は声を上げる前に海中に沈む。

「助け……私……泳げな……」

セレナは藻掻きながら、途切れ途切れに助けを求める。ミスティはそんなセレナに肩を貸す。ミハイルは海中で気を失っているフェルトを背に背負う。

「とにかく陸へ！」

そう言ってミハイルは、陸へ向けて泳ぎだす。ミスティもなんとか泳ぎ、あとに続く。

第六章 一部

リース地方・バーレーン地方境界線。その海岸線に四人の人影がある。

「あー、あれだ。ツいてないと思って、陸地を歩こうぜ」

ミハイルが苦笑いを含みながら、怒り狂うミステイをなだめている。その傍らには、ほとんどの魔力を使い果たし、意識を失っているフェルトと、ミステイに恐怖を感じるセレナがいる。

「あの船で三日も掛かるのに、歩いたら何日掛かると思ってたの！あー！ ムツカつくわ！」

普段のミステイからは想像も付かないくらいに乱れている。すでに、その怒りのはけ口として、近くの森林の木が五本と、一メートルくらいの石が、文字通り真つ二つになっている。

「お、落ち着け！ とにかく落ち着け！」

ミハイルは手の平をミステイに突き出し、多少の距離を保っている。近付けば、自分もあの木や石みたいになってしまうかもしれないからだ。

「ああー！ ムツツツカつくー！」

そしてまた、手近な木が一本犠牲になった。

クルーズヒスト、宿屋。

「……う、んん？」

ぼやける視界。痛む体。目覚めたばかりで、状況を把握出来ない。気を失っていたのはわかるが、気を失う前の出来事を思い出せない。仕方ないので、自分の思っている事を口にする。

「……飯は？」

「目覚めて開口第一声がボケか！」

思い切り後頭部を打たれ、強い衝撃が襲う。それで、まだあやふやだった意識が戻った。

「イタタタタ……あれ？ ラーバル？」

きょとんとした顔でラーバルを見つめるエル。ラーバルは呆れたように、深くため息を吐いた。

「まあ、無事だったからいいか」

そう言っ、うれしそうに笑うラーバル。不意に、エルの頭を腕と胸で固定する。

「まったく、三日も氣い失いやがって。心配掛けすぎだったの！」

ラーバルはエルの頭を、拳を使って練り回す。

「イダダダ！ マジ痛いマジ痛い！ ギブギブー！」

エルは目に涙を浮かべながら、ラーバルの腕を何度も叩く。だが、二人は本当に楽しそうに笑っていた。

「あ、エル、やっと起きたの？」

扉を開き、うれしそうな顔で入ってきたティナに、ラーバルに束縛されながらも笑顔でピースをするエル。

「へへッ！ もう元気いっぱいだぜ！」

そう明るく言うエルに、笑顔で答えるティナ。その後ろにいたジンも自然に笑みをこぼす。

「じゃあ、エルも目覚めたことだし、そろそろ出発するか」

ラーバルはそう言っ、ベッドから立ち上がり、自分の槍を手に持った。エルもうなずき、ベッドから降りる。

「え？ もう行くの？」

ティナは首を傾げながら尋ねた。ラーバルは荷物をまとめながらうなずく。

「ああ。またいつ、あのモトリとかいうやつが俺たちを襲ってくるかもわからないしな。早めに出たほうがいいだろ」

ティナがコクンとうなずいて納得し、エルはわからない、という顔をする。

「まあ、おまえに言っ、たところわからないだろうな」

ラーバルは笑いながらエルに言い、頭に手を乗せる。
「ば、馬鹿にすんなよな！」

ラーバルの手を弾き、膨れるエル。ラーバルは苦笑いした。

「んで、どこに行くの？」

エルは手を後ろに回し、海に浮く船を見つめながら、隣に立つラーバルに尋ねる。

「この港から、ガーランドっていう港町に船が出てる。まずそこに行つて、そこでクック港つてとこに行く船に乗る」

ラーバルは腰に手をあて、エルと同じように船を見つめながら言つた。二人の目は、初めて見る船に輝いている。

「まあ、敵の本陣に乗り込もうつて寸法だ」

ラーバルは楽しそうに笑う。エルは何度もうなづく。

「つまり、こつちから行つてやろう！ てこと？」

ラーバルは、そうだと言ってエルの背中を叩く。エルは軽く咳き込み、ラーバルを睨む。ラーバルはそれを無視し、ジュンに振り返る。

「どうする？ 俺たちはこの船でガーランドに行くけど」

ラーバルが尋ねると、ジュンは少し俯く。上目遣いでラーバルを見上げる。

「我は……おぬしらの仲間では……ないからのう……」

そう言つたジュンに対し、エルとラーバルは同時にため息を吐いた。

「なに言つてんだよ。俺らは仲間だろ？」

ラーバルは微笑みながら、やさしく言つた。ジュンは顔を紅く染め、ラーバルから目を逸らす。

「……我も、おぬしらの旅路に同行させてもらえるかの？」

ジュンがそう尋ねると、ラーバルはジュンの肩に手を乗せ、当た

り前だるとつぶやいた。ジュンは顔を上げ、笑った。

大きな貿易船が、クルーズヒストの港から出航した。その船は貿易だけでなく、人々の舶来の足にもなっている。

「なんだか、しょっぱいような匂いがする」

ティナは、今まで嗅いだことのない不思議な香りに首を傾げる。

ラーバルが手にお菓子を持ってティナの隣に並ぶ。

「それが海の匂いさ。キツインなら、部屋に戻ったほうがいいぞ？ 船の揺れがプラスして、一気に気分が悪くなるからな。アレみたいに」

ラーバルはそう言うと、デッキの反対側を指差した。ティナが顔を向けると、手摺りに寄り掛かるエルとジュンがいた。

「うう……やはり、船というものはあまり好きではない」

「俺はむしろ嫌い……うえ」

ラーバルとティナは苦笑いし、顔を正面に戻した。

「ああなるから、無理しないほうがいい」

ラーバルがそう言うと、ティナは首を横に振る。

「ううん、気持ちいいの。この風と、香りが。だから、もう少しここにいます」

ティナは潮風に耳を揺られ、目を瞑る。ラーバルは微笑み、お菓子をお口にしました。

第六章 二部

海は荒れてはいない。むしろ、不気味なくらいに静かだった。船長は不気味に思い、デッキにでる。

「こんなに波が無いなんて……変だ」

海を覗いた船長がつぶやく。その船長に一人近づくと影がある。

「どうしたんですか？」

その人物、ラーバルが船長に尋ねる。船長は振り返り、表情を明るくする。

「いいえ、何でもありません、お客様。もう夜も深いことですし、お休みになられたほうがいいですよ」

乗客に余計な心配を掛けさせない。船長は船長としての義務を果たす。だが、ラーバルは船長の異変を見抜いていた。

「何か大変なことが起きたら、俺が手伝いますよ」

そう言い残し、ラーバルは船内へと消える。船長はため息を吐き、まだ修練不足かとうなだれた。

「……」

ラーバルはベッドの隣に立ち、目を瞑っている。他の三人は寝息を立てている。

「……なんだ？ さっきから聞こえるこの音は？」

目を開き、窓に近寄る。外は波が無く、船のエンジン音が響くのみだった。満月が室内をほの明るく照らす。

「音じゃねえ、歌か……」

外から僅かに歌が聞こえてきた。透き通るような歌声で、聞いたことのない言葉で構成されている。

「気味が悪いぜ」

でも、心地いい。ラーバルは二つの感情で揺れ動く気持ちを放置できず、再びデッキに向かうことを心に決める。その歌声の正体を突き止めようと。

「槍は……一応持ってたか」

背中に一振りの槍を携え、ラーバルは部屋を出る。

ラーバルがデッキに出ると、すでに複数の乗客がデッキに出ていた。

「な、なんだあ？」

その異様な光景に、ラーバルは驚きを隠せなかった。眠っているはずの乗客たちがデッキに出ているからである。

「てかこいつら、みんな眠ってる？」

確認の為に乗客一人一人の顔を覗く。確かに、目を瞑り、寝息を立てている。全員眠っているのだ。

「……この歌が原因か。早いとこ正体を暴か……ない……と」

突如、ラーバルを眠気が襲った。必死に耐えるラーバル。しかし、睡魔は徐々にラーバルの精神を蝕んでいく。

「ちく、しょう……なんだ……この歌……は」

ふと耳を澄ませると、歌声が近くで響いていることに気が付いた。ラーバルが視線を船首のほうに向けると、島が見えていた。その島は、不気味なくらいに綺麗に見えた。そして、ラーバルの意識は途絶える。

船は静かに、ゆっくりと、島へと向かって行く。歌声に導かれるかのように。

「う、ん……」

エルが目を覚ます。しばらくはつきりしない意識のまま、ベッドを降りる。しばらくは、まわりの異変に気付かない。

「……あれ？」

徐々に意識が戻ってきたエルは、やっとまわりの異変に気付いた。改めて室内を見渡す。

「みんなが、いない？」

室内をしばらく見渡した後、部屋を出た。廊下にも誰もいない。

不思議に思い、デッキへと向かう。

「……誰もいない」

エルはあちこちと視線を飛ばすが、人は見えない。

「……みんな、どこ？」

叫んでみるが、返事は返ってこない。段々と心細くなり、落ち着きを無くしていく。が……。

「ん、なんだろ、ここ島？」

落ち着きを取り戻し、今現在の場所を確認した。怪しげな島。入るのを遠慮したくなるような薄暗い森。この状況に、エルの本能がざわめく。

「……き、きつとみんなあの森の中だ。うん、間違いない！」

みんなを探すという大義名分が出来たエルは、迷う事無く森へと向かうのであった。

森の中は案外静かで、風に揺れる木々の音しか響いていない。魔物も姿を見せない。不気味なほどに静まり返っている。

「お化けかなんか出るかな……」

エルは目を輝かせつつ、森の奥へと進む。奥に進むにつれ、エルの心に哀愁の感が芽生えてきた。

「あれ？　なんだか、妙に悲しいような、懐かしいような……？」
不思議な感覚だった。この島には、今まで一度も来たことはない

し、似たような地形の場所を見たこともない。

不意に、涙が一筋頬を伝った。

「？ あれ、泣いてる……？」

エルは改めて、この島に引かれた。頭を軽く振るい、気持ちを改めて奥へと進む。

第六章 三部

冷たい床の上、ある槍使いが目を覚ます。軽く屈伸運動をしたあと、辺りを見回す。

「さつてと、ここ、どこだ？」

暗くてよくは見えないが、ちらほらと人がいることは確認できた。近づこうと思い、槍を取り出そうと手を背に向かわせるが、空を切った。

「あ、やっぱり」

彼は軽く落胆したあと、人影の方へと歩み寄る。普通ならこの状況に混乱してもおかしくないが、彼はまったくそんな様子を見せない。

「お、ティナか。大丈夫か？」

彼に声を掛けられた少女、ティナは、声の主を見上げる。

「ラーバル！」

思わず歓喜の声をあげ、ラーバルへと抱きつくティナ。よしよしとティナの頭を軽く撫で、辺りを見回すラーバル。

「おい。エル、ジュン、いるかー？」

「その声は、ラーバルか」

ラーバルの問い掛けに、少女が一人答えた。ジュンは暗い中を、ラーバルの第一声を頼りに向かう。

「おうジュン、エルを知らねえか？」

ラーバルがジュンに尋ねると、いや、知らぬと首を横に振る。ラーバルはそれを聞くと、かすかに微笑んだ。

「あいつはつまり、外にいるわけか。見つけてくれるといいが……こっちはこっちで動くか」

ラーバルの提案に賛成する二人。

「いったい何なんだろ、この島」

そのころ、エルは一人森林の中を歩いていた。時々出てくる魔物を蹴散らしつつ、勘を頼りに奥へと進む。

来たこともないこの島が、とても懐かしく感じる。何故かをとても確かめたかったが、今はラーバル達を探したほうがいいような気がした。

「まったく、みんなどこ行っちゃったのかな？」

エルは剣で、行く手を遮る草木を薙払いつつ、奥へ奥へと進んでいく。

しばらく進むと、広い空き地のようなところに出た。

「ん？　なんか色々転がってるな」

エルは地面に転がっている棒状の物を掴んで持ち上げた。よくよく観察すると、それがあるものに見えてきた。

「……………んー、骨？」

手触り、重量、そして形状からして、それが何らかの動物の骨であると判明した。エルは改めて周囲を見渡してみた。

「うわー、いっぱい落ちてるよ。もしかして、ここ……………」

言いかけて、草むらから何かが近づいてきた。あわててそちらに振り返ると、仮面を付けた男がエルのそばに立っていた。

「そうだな、ここは何かの巣だろう。よくわかったな少年」

そばに立った男は、そう言ってエルの肩を叩いた。しかし本当は、エルはここは墓場だと思っていたのだが、男のことを氣遣^{あし}つて黙る。「早めにここから抜けたほうがいいな。じゃないとこの主^{あるじ}が戻ってきて、面倒なことになる」

言いおわったあと、男は右の方向を向く。エルも同時に同じ方向を向いた。

「来た」

二人の声が重なった。視線の先の茂みから、大きな魔物が現れた。頭は恐竜のような形をしており、牙が鋭く大きい。二足歩行らしく、

太く短い両足で大地を踏みしめ、太く長い尻尾でバランスを保っているようだ。腕は四本あり、それぞれが丸太のように太かった。

「『ティガブルエラス』か……。やっかいな奴に出会ったな」

男はつぶやくように言うと、腰に差した剣を引きぬいた。男の使う剣は、肉厚の曲刀である。男にならない、エルも背に掛けた剣を引き抜く。男は一瞬驚いたが、すぐにティガブルエラスに視線を戻す。ティガブルエラスが二人に気付くと、瞳に怒りの色を映した。巢を荒らされていると思ったのだらう。盛大に鳴き声を上げ、二人に向かって突進していく。

「うわっ速！」

ティガブルエラスは、その短い足からは想像もできないほどの速度で突っ込んできた。振り下ろされた拳をかわしつつ、斬撃を加えるエル。しかし、皮一枚を裂いただけで、大したダメージを与えられなかった。

「こいつの皮膚は厚いようだ。加減した攻撃では、薄皮一枚を切るだけで終わるだらうな」

男はサイドステップでうまく攻撃を避けている。空振るティガブルエラスの拳が地面にくぼみを作る。

不意に男が深く踏み込み、曲刀を水平に構える。
マイチモン
「真一文」

構えた曲刀を水平に振るう。次の瞬間、ティガブルエラスの胸部に深い切れ込みが付いた。悲痛な鳴き声を上げ、四本の腕で乱打を繰り返す。男はすべて曲刀で防ぎきる。

「浅かったか」

距離を置き、冷静に分析をする。その間に、ティガブルエラスの傷口が少しずつ治癒していく。

「傷が治ってくー！　ずる！」

エルはそう言いつつも、攻撃を休めたりはしない。かわしつつ、隙を見ては攻撃を加えている。この短期間で、さらに成長したようである。

「円周斬！」

エルの放った回転切りは、ティガブルエラスの皮膚を切り裂く。反撃のための尻尾振りを軽々と避けるエル。その際にもカウンターで皮膚を裂く。

男はエルの動きをみて、感嘆していた。少年なのに、ここまで戦えるのだから。

「少年、やるではないか」

男に誉められたエルは、へへへと笑ってみせた。バカにされていると思ったのか、ティガブルエラスは大きく吠えた。

「では少年、そろそろ終わりにしようか」

「うん！」

男とエルは同時に構え直し、同時に突っ込んでいった。

「豪破斬！」
ゴウハザン

「縦振斬！」

二人同時に縦に切り付ける。ティガブルエラスの体に二筋の斬痕がつき、うめき声をあげて後ろによろめいた。

「ではいこう。ザン・ジュウモンジ 斬・十文字」

男は滑らかに曲刀を滑らせ、ティガブルエラスの体に十の字を深く刻み込んだ。しかし倒すまでには至らなかった。

「少年、やってみるといい」

男はティガブルエラスの反撃を軽々と避け、エルの肩を叩いた。まっつてましたと言わんばかりにエルは飛び出した。

「円周斬！ 流水葉浪翔！」

エルも流れるように斬撃を決め、身を屈めた。

「秘奥義、樹葉突風閃！」

切り上げ、切り下ろしを繰り返して、回転切りを放った。そして風の刃が追い討ちをかける。その一つの流れは、最初の頃よりも遙かにうまく繋がっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1201b/>

Tales of Caprice

2010年10月11日19時16分発行